

- [日本語](#)

## 「アンソニー・ファウチの正体」第一章 パンデミックの管理ミス iii: イベルメクチン

[RFK Jr.、子どもの健康防衛 \(CHD\)、JFK「アンソニー・ファウチの正体」生物兵器ワクチン](#)

サイトのご利用には[利用規約](#)への同意が必要です

10

### iii イベルメクチン

2020年の夏までに、第一線の医師たちは、その驚異的な救命効果においてヒドロキシクロロキンに匹敵する別の COVID 治療薬を発見していた。

その5年前、メルク社の2人の科学者が、回虫、鉤虫、河川盲目症、リンパ系フィラリア症などの幅広いヒトの寄生虫に対して前例のない威力を発揮するイベルメクチン (IVM) の開発でノーベル賞を受賞した<sup>1</sup>。FDAは1996年にIVMをヒトへの使用が安全かつ有効であると承認した。WHOは、ヒドロキシクロロキンとともにIVMを「必須医薬品」のリストに加えている。このリストは、必要性、安全性、有効性、手頃な価格を備えた医薬品のリストで、WHOは「国民の優先的な医療ニーズを満たすために」IVMの入手が不可欠であると判断している<sup>2</sup>。

WHO は、寄生虫感染の可能性のある人々を治療するために、全人口にイベルメクチンを投与することを推奨している。何百万人もの人々が抗寄生虫剤として何十億回も IVM を服用してきたが、副作用はほとんどない。イベルメクチンの添付文書によると、少なくともタイレノールやアスピリンなどの一般的な市販薬と同程度の安全性があるとされている。

日本の北里研究所の研究者たちは 2011 年に IVM について、他の薬にはほとんど使われない用語で説明した論文を発表した。



「ワンダードラッグ」と呼ばれるような薬はほとんどなく、ペニシリンとアスピリンが人類の健康と幸福に最も大きな影響を与えてきた。しかし、イベルメクチンは、その汎用性と安全性、そして世界中で、特に世界の最貧層の何億人もの人々に有益な影響を与えてきたことから、これらの有力な候補者と並んで検討されるべきである 4。

カーターセンター、世界銀行本部、世界保健機関本部の3つの銅像が、イベルメクチンの開発を称えている。



なぜなら、2012年以降、複数の試験管内試験研究により、IVMが様々なウイルスの複製を阻害することが実証されているからである。ネイチャー誌は2020、50年にわたる研究を総括し、IVMが「一部のウイルスを含む微生物に高い効果がある」とし、動物実験では「ジカ熱、デング熱、黄熱病、ウエストナイルなどのウイルスにイベルメクチンの抗ウイルス効果がある」という結果を報告している。

5

2020年4月3日、オーストラリアのモナシュ、メルボルン大学、ロイヤルメルボルン病院の研究者が発表した「抗寄生虫薬のイベルメクチンが48時間で細胞

内の SARS-CoV-2 を除去することを実験で確認」という記事 6 は、COVID の治療薬として IVM が世界的に注目されるきっかけとなった。この安全で安価な、よく知られた、すぐに手に入る薬が、細胞培養で SARS-CoV-2 を破壊したと、海外のマスコミは最初に絶賛した。「この研究に基づき 2020 年 5 月 8 日、当時 COVID の大パンデミックで四面楚歌になっていたペルーは、イベルメクチンを国家ガイドラインに採用した。「ペルーの医師たちはすでにイベルメクチンを知っていて、寄生虫に広く処方していたし、保健当局もイベルメクチンが安全であることを知っていて、安心して使っていました」とピエール・コリー博士は振り返る。ペルー政府がイベルメクチンを効果的に配布した地域では、COVID による死亡者数が 14 倍と急激に減少した。死亡数の減少は、25 の州すべてで IVM が配布された範囲と相関していた。2020 年 12 月、ペルーの新大統領は WHO からの圧力を受け、IVM の配布を大幅に制限したため、COVID の感染者数は回復し、死亡者数は 13 倍に増加した 8。

予防研究において、イベルメクチンは、COVID に対してワクチンよりもはるかに高い効果を、わずかなコストで繰り返し示した。

例えば、アルゼンチンでは 2020 年の夏、ヘクター・カバリョ博士がイベルメクチンの予防薬としての無作為化プラセボ対照試験を実施し、COVID に対して

100%の効果があることを確認した。カバリヨ博士のチームは、週1回イベルメクチンの予防投与を受けた788人の労働者には感染が見られなかったのに対し、407人の対照群では58%がCOVID-19で発病していた<sup>9</sup>。



その後、バングラデシュで行われた観察研究<sup>10</sup>でも、医療従事者を対象にCOVID-19の曝露前予防としてイベルメクチンが検討されたが、ほぼ同様の素晴らしい結果が得られた。最小量のイベルメクチン（12mgを月1回、4カ月間）を服用したボランティア58人のうち、軽度のCOVID-19症状を発症したのは4人だけだったのに対し、投薬を拒否した医療従事者60人のうち44人であった。

さらに2021年の研究では、IVMの重要な生物学的メカニズムであるSARS-CoV-2スパイクタンパク質との競合的結合は、どのコロナウイルスの変異株にも特異的ではなく、したがってワクチンとは異なり、イベルメクチンはおそらく将来のすべての変異株に対して有効であることが示唆された<sup>11</sup>。

2020年3月1日には早くも、ICUやERの第一線で活躍する医師の中には、初期治療のプロトコルでヒドロキシクロロキンと組み合わせてイベルメクチンを使用する者が現れた。マイアミで働くベルギー人医師のジャン・ジャック・ラジター博士<sup>12</sup>は、3月15日にこの薬を使い始め、すぐに回復者の増加を確認した。彼は6月9日に優れた論文を発表した。一方、バングラデシュでイベルメクチンを使用している2人の西洋人医師も、病状が悪化した患者であっても、非常に高い確率で回復したと報告している<sup>13</sup>。



医師がCOVID-19に対して初めてIVMを使用した2020年3月以降、20件以上の無作為化臨床試験(RCT)により、入院治療と外来治療の両方でCOVIDに対する奇跡的な有効性が確認されている。2021年に完了したIVM治療RCTの7つのメタアナリシスのうち6つで、COVID-19による死亡率の顕著な減少が認められた。エール大学の著名な疫学者であるHarvey Risch博士は、「関連する研究はすべて、高リスクの外来患者に有意な効果を示しました」と述べている。ま

た、COVID-19 の死亡率が高かったのは、COVID-19 の非常に後期の患者であった。

しかし、後期高齢者であっても、ほぼすべての研究で、やや劇的ではないものの、効果が認められている。マカロー博士らによる 2020 年のレビューによると、

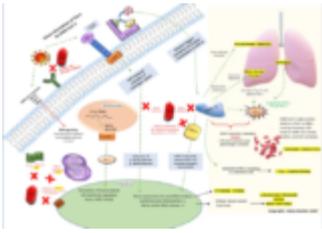
「ピアレビューされた無作為化比較試験を含む数多くの臨床研究で、予防、早期治療、そして後期の疾患管理においてイベルメクチンの大きな効果が示されました。現在、世界中で行われている何十もの臨床試験は、臨床効果を確実に評価し、許容可能な安全性を伴った有益性のシグナルを推論するのに十分なものです」14。

2021 年 1 月初旬、バージニア州の 7 つの老人ホームで前年の春から 191 人の感染者を治療してきた老人専門医のデビッド・チェスラー博士は、Dr.ファウチに手紙を出し、イベルメクチンを使用して 8%の死亡率を達成したと主張した-米国の老人介護施設の平均死亡率の半分（14 万 6 千人）である。チェスラー博士は Dr.ファウチへの手紙の中で、他の国で同様の効果があったと報告されている査読済みのケーススタディを添付している。Dr.ファウチも NIAID の他の誰もチェスラー博士の手紙に返信しなかった 15。

Annals of Dermatology and Venereology 誌は、フランスのある老人ホームで COVID-19 が発生した際、69 人の入居者（平均年齢 90 歳）と 52 人の職員全員



研究によると、イベルメクチンは 20 もの異なるメカニズムで作用すると考えられている。その中でも、イベルメクチンは「イオノフォア」として機能し、ウイルスの複製を阻害する亜鉛の細胞内への移動を促進する。イベルメクチンは、このようなメカニズムやその他のメカニズムによって、COVID-19 や季節性インフルエンザをはじめとする多くのウイルスの複製を阻止する。例えば、Choudhury らによる 2021 年 3 月の研究<sup>18</sup>では、「イベルメクチンは、ウイルスのレプリカーゼ、プロテアーゼ、およびヒト TMPRSS2 のブロッカーとして発見され、これが抗ウイルス効率の背後にある生物物理学的基盤である可能性がある」としている。また、この薬は複数の経路で炎症を抑え、それによって臓器の損傷を防ぐ。さらにイベルメクチンは、スパイクタンパク質がヒトの細胞膜上の ACE2 受容体に結合する能力を損ない、ウイルスの侵入を防ぐ。さらに、スパイクタンパク質に結合することで血栓を防ぐとともに、スパイクタンパク質が赤血球上の CD147 に結合することで血栓を誘発することを抑止する。患者が曝露前に IVM を服用することで、感染を防ぎ、その後の感染を食い止め、地域全体を守ることができるのである。



## SARS-CoV-2 に対するイベルメクチンの作用機序：エビデンスに基づく臨床レ

### ビュー記事

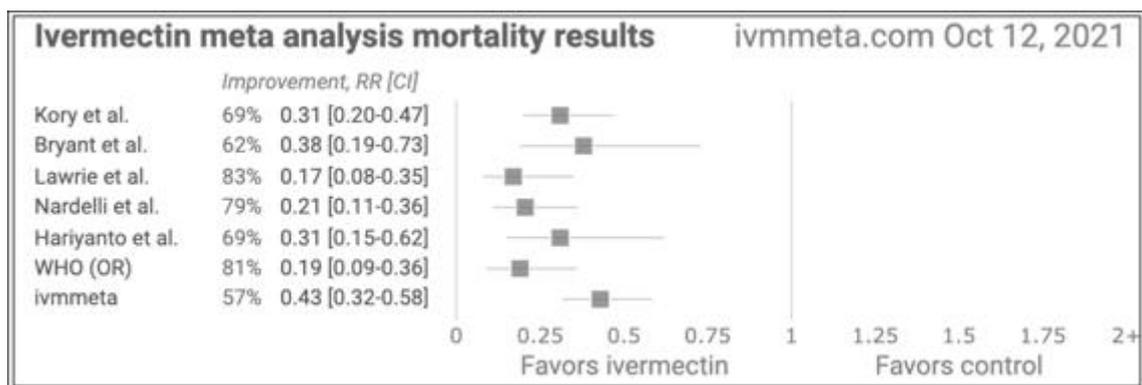
発行日：2021年6月15日 概要 現在進行中の COVID-19 パンデミックの緊急性、さまざまな新しい変異株の検出、および将来的な新型コロナウイルスの再出現の可能性を考慮すると、イベルメクチンのような承認済み医薬品の再利用は注目に値するだろう。このエビデンスに基づく総説は、SAR

2021年3月、ピーター・マカローをはじめとする複数の国の第一線で活躍する医師 57 名による研究結果が発表され、「我々の早期外来治療レジメンは、入院および死亡を推定 87.6%および 74.9%減少させることに関連していました」ことが明らかになった<sup>19</sup>。

他の多くの研究もマカロー博士の結果を支持している。2021年1月に NIH COVID-19 治療ガイドラインパネルで発表されたメタアナリシスによると、18 件の試験に基づく死亡率の平均低下率は 75%です<sup>20</sup>。WHO が主催した 11 件の試験のメタレビュー<sup>21</sup>でも同様に、イベルメクチンが COVID-19 の死亡率を 83%も減少させることが示唆されている。以下は、イベルメクチンの死亡率に対する

効果を調べた7つのメタアナリシスのまとめである。いずれも大きな効果が認められ、57%から83%の間で死亡率が減少した。

以下は、COVID 予防のためのイベルメクチンの研究をまとめたものである。予防的に使用した場合、イベルメクチンは平均して86%の有害事象を予防した。これらの研究では、COVID 予防のためにイベルメクチンを使用した人の7人に6人を保護した。



また、イベルメクチンを用いた COVID の早期治療に関する 29 件の研究では、平均して 66%の利益が得られた。ここで紹介した3つの表と、それに隣接する森林図は、ivmmeta.org のウェブサイトで見ることができる。これらは、COVID-19 の 27 種類の治療法のそれぞれについて、完了した検証済みの研究をまとめた、より大きなウェブサイト c19study.com の一部である。

2021年1月、『The Lancet』誌に掲載された研究では、イベルメクチンが症状の強さと期間、ウイルス負荷を劇的に減少させることが明らかになった<sup>22</sup>。

2020年3月、イースタンバージニア医科大学の集中治療医長である Paul Marik 博士が、COVID 患者のケアのための治療ガイドラインの掲載を開始した。集中治療医学の教授として最もよく知られ、出版物も多いマリク博士は、この新しいウイルスに対するあらゆる可能なアプローチを体系的に研究するために、世界中から最も尊敬され、最も出版されている一流の ICU 医師のチームを募った。間もなく、彼の組織である Front Line COVID-19 Critical Care Alliance (FLCCC) がウェブサイトを作成し 2020 年 4 月中旬に最初の治療プロトコルを掲載した。

2020 年 11 月には、FLCCC の医師たちは、イベルメクチンをプロトコルに追加するのに十分なエビデンスがあると感じた<sup>23</sup>。「データは、イベルメクチンという薬が COVID-19 を予防し、初期症状のある人が炎症亢進期に進行しないようにし、さらには重症患者の回復を助ける能力を示しています。」<sup>24</sup> 査読者は FLCCC の病院のプロトコルの臨床的・科学的根拠を認め、Journal of Intensive Care Medicine 誌は 2020 年 12 月中旬にそれらを発表した<sup>25</sup>。FLCCC はまた、イベルメクチンの臨床試験のエビデンスを 1 ページにまとめてウェブサイトに掲載した（定期的に更新される）<sup>26</sup>。



2020年12月、FLCCCの社長兼最高医学責任者であるピエール・コーリー博士（肺と重症患者の専門家）は、上院国土安全保障・政府問題委員会を含む多くのCOVID-19パネルでイベルメクチンの利点を証言した<sup>27</sup>。コーリー氏は、刺激的な証言の中で次のように述べている。

合計2,400人以上の患者を対象とした6つの研究では、COVID-19にさらされた人々のウイルス感染をほぼ完全に防ぐことができた。3つのRCT（無作為化比較試験）と3,000人以上の患者を対象とした複数の大規模ケースシリーズでは、入院中の患者が見事に回復し、3,000人の患者を対象とした4つの大規模無作為化比較試験では、イベルメクチンを投与した場合、死亡率が統計的に有意に低下した。その2週間後の2021年1月6日、コーリー博士は米国国立衛生研究所のCOVID-19治療ガイドラインパネルで講演を行った<sup>28</sup>。Éminence griseのPaul Marik博士をはじめとするFront Line COVID-19 Critical Care Allianceのメンバーもイ

ベルメクチンに関するポジティブなデータを発表し、WHO のメタアナリシスの著者であるアンドリュー・ヒル博士も一緒に発表した。



リバプール大学で WHO のために行われたヒル博士の研究を引用した記事が、Financial Times 紙に掲載された。ヒルが行ったイベルメクチンに関する 6 つの研究のメタ分析では、中等度から重度の COVID-19 患者において、イベルメクチンが炎症を抑え、ウイルスの排除を早めることで、死亡リスクが累積で 75%減少することが示されていた 29。

コーリー博士は、「IVM により、入院をほぼ 90%、死亡をほぼ 75%減らすことができる」と証言している。コーリー博士は、マカロー博士、フロリダ州の Joe Ladopo 外科医長、ポール・マリク教授、ジョセフ・バロン博士、mRNA ワクチンの発明者であるロバート・マローン博士など、第一線で活躍する多数の医師の

一人であり、イベルメクチンによる早期治療により、75%~80%の死亡を回避でき、我が国の宝を1兆円も節約できたと考えている。

「COVIDの結果、アメリカでは約600万人の入院と70万人以上の死亡が発生した」とコーリー博士。

「もしヒドロキシクロロキンとIVMが組織的に抑制される代わりに広く使用されていたら、75%、つまり少なくとも50万人の死亡と、80%、つまり480万人の入院を防ぐことができたであろう。また、各州に数千億円の負担をかけることもなかったであろう」

と述べている。



## 「文字通りの犯罪」イベルメクチンのデータを隠蔽して「50万人の命」を犠牲にしたと医師が告発

'Literally criminal': Suppressing data on ivermectin cost 'half a million lives', doctor charges 2021年5月26日のWorldTribuneの特別記事 解説：R.クリントン・オーラ

FLCCC の発表から 10 日後の 1 月 14 日、NIH の COVID-19 治療ガイドラインパネルは、イベルメクチンに関して医師に否定的な勧告をしていたが、これを「賛成でも反対でもありません」と変更し、医師が IVM を治療の選択肢として使用する道を少しだけ開いたのである。これは、NIH の委員がモノクローナル抗体や血漿療法に対して行った中立的な推奨と同じである。モノクローナル抗体は入院を防ぐ効果があったが、回復期血漿は「全米のほとんどのアカデミック・メディカル・センターで愛用されていたが、多くの臨床試験で効果を示すことができなかった」とコーリー博士は述べている。



COVID-19 に対するイベルメクチンの安全性と有効性を示す強力な証拠がある中で出された NIH の中立的な 202130 年 1 月 14 日の「非推奨」31 は、IVM を抑制するという NIH の決意を示す最初の明白なシグナルであった。NIH は、「COVID-19 の治療にイベルメクチンの使用を推奨するには、証拠が不十分です」と主張した。

NIH は、イベルメクチンの審議に参加した委員会のメンバーを公表せず、情報公開法に基づく様々な要求により提出を余儀なくされた文書からも彼らの名前を削除するなど、非推奨に至った経緯を秘密にしていた。しばらくの間、Dr.ファウチとフランシス・コリンズ、そしてパネリスト自身だけが彼らの身元を知っていた。NIH は、名前を秘密にしておくために極端な手段をとり、連邦裁判所にまで出向いて議事の透明性を確保しようとした 32,33。

コリンズ博士と Dr.ファウチがプロセスを日の光から遠ざけようとしているとき、米国疾病予防管理センター（CDC）は、別の情報公開請求に応じて、グループの 9 人のメンバーを開示した 34。

NIH ガイドライン委員会の 4 人目のメンバーであるスザンナ・ナギーは、NIH の非推奨を受けてイベルメクチンのさらなる研究を行うために 1 億 5500 万ドルの助成金 35 を受け取った。NIAID による Naggie への一攫千金の報酬は、委員会が IVM の承認を決議していれば、進まない可能性があった。

今日、Dr.ファウチが米国でイベルメクチンの使用を全面的に廃止するように動いている間に、他の国ではイベルメクチンの使用量が増えている。

2021年2月には、東京都医師会の会長が記者会見を開き、外来診療のプロトコルにイベルメクチンを追加することを呼びかけた。インドのいくつかの州では、COVID-19対策のための必須医薬品リストにイベルメクチンを加えてた<sup>36</sup>。インドネシア政府は、この薬の使用を許可しただけでなく、リアルタイムで入手できることを示すウェブサイトを作成した<sup>37</sup>。ファイザー社のCOVID-19ワクチンの3回目のブースター投与を行ったものの、依然としてCOVID-19による入院や死亡が高率で発生していたイスラエルでは2021年9月にイベルメクチンの公式使用を開始し、健康保険会社が高リスクの国民にイベルメクチンを配布している。エルサルバドルは、国民全員にIVMを無料で配布している<sup>38</sup>。



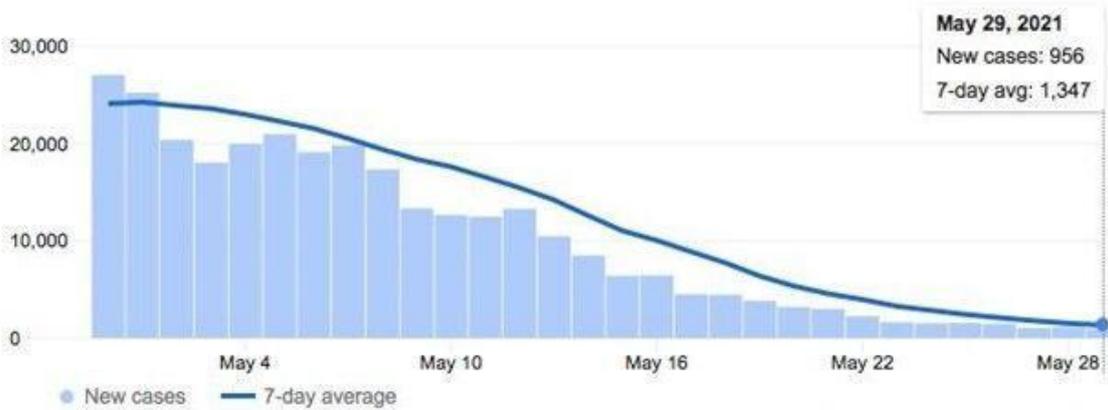
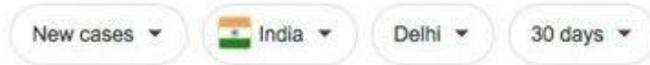
住民がイベルメクチンを容易に入手できる国では、必ずCOVIDによる死亡者数が即座に、かつ劇的に減少している。インドネシアの病院では2021年7月22日にイベルメクチンの使用を開始した。8月の第1週までに、感染者数と死亡者数は激減した<sup>39</sup>。

2020年12月の研究では、さまざまな寄生虫疾患の治療と予防にイベルメクチンを広く使用しているアフリカとアジアの国々は、報告されているCOVIDの症例と死亡率が世界で最も低いことが示された<sup>40</sup>。人間開発指数（HDI）を含む交絡因子をコントロールした結果、オンコセルカ症（別名「河川盲目症」、イベルメクチンが標準治療となっている）のためのアフリカプログラム（APOC）に加盟しているアフリカ11カ国は、非APOCのアフリカ諸国に比べて、死亡率が28%低く、COVID-19の感染率も8%低いことがわかった。

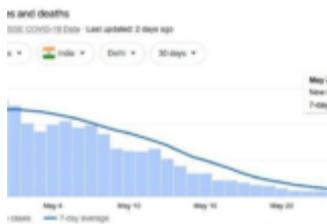
2021年4月20日、インドの医学会は、イベルメクチンを国内プロトコルに追加した。インド内外のニュースによると、COVIDが猛威を振るっていたインドのニューデリー州政府による積極的なキャンペーンが見事に成功したという。『The Desert Review』は2021年4月、ニューデリーはCOVIDパンデミックの危機を迎えていたと報じている。州政府はイベルメクチンを配布することで、デリーの症例の97%を消滅させた<sup>41</sup>。「IVMがニューデリーでCOVIDを粉碎<sup>i</sup>」とジャスタス R. ホープ医学博士は書いている<sup>42</sup>。TrialSite Newsによると、IVMの導入後、症例は劇的に減少したという。

## New cases and deaths

From JHU CSSE COVID-19 Data · Last updated: 2 days ago



「国レベルでは、4月の初めに国を覆った大規模な急増は、イベルメクチンとブデソニドの使用を含む新しい COVID-19 プロトコルが導入された後、急激に減速した。」



## イベルメクチンがデリーの症例の 97%を消し去る

Ivermectin obliterates 97 percent of Delhi cases イベルメクチンでデリーの症例が 97%減少したことは決定的だ。このグラフは、命を救い、人権を守るための壮大な闘いの最後の一步を踏み出したことを表している。このグラフは、理性が腐敗に、善

43 インドでは、ブデソニド、イベルメクチン、ドキシサイクリン、亜鉛という 2～5 ドルの早期併用療法により、COVID の症状が 3～5 日で消失することが示された。2021 年 1 月までに、13 億人以上の人口を抱え、ワクチンの接種率が全国で約 7.6%<sup>44</sup> であるこの国では、COVID による死者数はわずか 15 万人であった<sup>45</sup>。インドの政府関係者や医師の多くは、イベルメクチンが疫病の発生を抑える奇跡の薬だと考えている。

ウッタル・プラデーシュ州の人口は 2 億 4100 万人で、アメリカの人口の 3 分の 2 に相当する。インディアン・エクスプレス紙によると、<sup>47</sup>「ウッタル・プラデーシュ州は、イベルメクチンの大規模な予防的・治療的使用を導入した国内初の州である。2020 年 5 月から 6 月にかけて、Anshul Pareek 医師が率いるアグラ [ウッタル・プラデーシュ州第 4 の都市] のチームは、実験的に同地区の RRT チームメンバー全員にイベルメクチンを投与した。<sup>48</sup> ウッタル・プラデーシュ州のサーベイランス・オフィサーである Vikssendu Agrawal 氏は、アグラでの調査結果を受けて、州政府は COVID 患者のすべての接触者にイベルメクチンを予防薬として使用することを承認し、感染者への投与を開始したと付け加えた。

9 月になると、ウッタル・プラデーシュ州政府は、ワクチン接種率がわずか 5.8% であるにもかかわらず、同州の 33 地区にはほとんど感染者がいないと発表した<sup>49</sup>。

50 アメリカのワクチン接種率が54%だった頃は、まだ感染者が増え続け、各国政府は厳しい規制をかけてた。2021年8月10日の時点で、米国では新たに16万1990人の患者が発生し、1049人が死亡した<sup>51</sup>。一方、ウツタル・プラデーシュ州では、新たに発生した患者はわずか19人、死亡者は1人で、米国の1000倍以上も低い水準であった<sup>52</sup>。

Agrawal博士は、イベルメクチンをタイムリーに導入したことで、COVIDの第一波を食い止めることができたと考えている。「最大の人口基盤と高い人口密度を持つ州であるにもかかわらず、陽性率と人口100万人あたりの症例数は比較的低く保たれている」<sup>53</sup>。

TrialSite Newsによると、インド政府がイベルメクチンとブデソニドの使用に成功したにもかかわらず、「メディアはこのニュースを伝えることに関心を示していない。それどころか、コメントではレムデシビルを有効な薬として宣伝し続け、イベルメクチンに言及している数少ないメディアでは、「証明されていない薬」や「時代遅れの治療法」と呼ばれている。まるで、現場と地域の医療システムに2つの異なる治療の現実があるかのようである。何百万人もの患者がイベルメクチンを投与されているのに、メディアの話題では知る由もありません」<sup>54</sup>。

一方、インドのタミル・ナードゥ州では、アンソニー・ファウチのプロトコルである、レムデシビルの投与、イベルメクチンの非合法化、早期治療の抑制が続けられてた。インディアン・タイムズ紙によると、タミル・ナードゥ州では、米国の大惨事と完全に一致する症例と死亡者数が続いている 55。

イベルメクチンを支持する膨大で圧倒的な証拠には、科学者のテス・ローリー博士による、高く評価されている査読付きのメタ分析がある。



ローリー博士は 15 の試験を評価し、IVM による死亡率低下の累積的な効果は 62%であるとしている。予防のためのイベルメクチンの研究では、データの質はそれほど高くなかったが、イベルメクチンの予防投与によって COVID の感染が 86%減少したことが示された 56。

世界的に有名なデータ研究者であり、科学コンサルタントでもあるローリー博士は、世界の公衆衛生科学者や機関の中でも象徴的な存在である。ローリー博士は、世界的に有名なデータ研究者であり、科学コンサルタントでもある。「The Desert Review」誌は、ローリー博士の能力、正確さ、誠実さを高く評価し、「医学の良心」57と呼んでいる。ローリー博士のコンサルティンググループである Evidence-Based Medicine Consultancy, Ltd.は、WHO や欧州政府をはじめとする国際的な公衆衛生機関や、コクラン共同計画などの国際的な科学・保健コンソーシアムのために、ガイドラインを作成・支援するための科学的レビューを行っている。彼女のクライアントには、IVM やその他の再製品化された医薬品の抑制に現在関与しているほぼすべての大きな政府規制当局が含まれている。

2000年12月末、ローリー博士はYouTubeでピエール・コーリーのイベルメクチンに関する上院証言のビデオを見つけた。興味を持ったローリー博士は、クリスマスから新年にかけて、コーリーが引用した27の医学文献の研究を検証するために、「実用的な迅速審査」を行い、それぞれの研究の質と力を評価した。

「1週間後、これはいけると思いました。IVMの安全性は、駆虫薬として広く使われていることで確立されていたから。しかし、その効果の大きさには驚かされました。COVIDに対する有効性は、複数の研究で一貫して明らかでした。これ

だけの方が死んでいるのだから、この薬を普及させるべきだという道義的な義務を感じました」

ローリー博士は、1月4日に英国の保健大臣 Matt Hancock 氏に Rapid Review を添付した緊急の手紙を送った。しかし、ハンコック氏からの返事はなかった。しかし、何者かが WHO の研究者であるアンドリュー・ヒルのメタレビューを Daily Mail 紙にリークし、その3日後にヒルが自分の研究のプレプリントを掲載したのである。1月13日の NIH 委員会でローリー博士と一緒にイベルメクチンを支持する証言をしてから1ヶ月、ヒルは首をかしげるような変化を見せた。ヒル博士の最初のメタレビューに掲載された7つの研究を総合すると、IVM を受けている患者の入院や死亡が劇的に減少していることがわかった。ヒルのメタレビューのリーク版には、COVID の奇跡的な治療法として IVM を大々的に宣伝していた論文と同じものがすべて含まれていたのである。ヒルは、結論だけを変えた。今回、彼は、それらの研究は証拠の質が低いと主張し、高い肯定的な結果が得られたにもかかわらず、その結果に「低い確実性」を付与したのである。そして、WHO は、長期にわたる無作為化プラセボ対照試験を行わずに IVM を推奨すべきではないと宣言したのである。「誰かが彼に伝えたのです」とローリー博士は言う。「誰かが彼にメモを送ったのです。アンドリュー・ヒルは、本当に暗い力に捕らえられてしまった。」

1月7日、ローリー博士は、Rapid Review で得られた圧倒的な証拠をまとめたビデオを英国の Boris Johnson 首相に向けて公開し、この難局を打開して直ちに IVM を導入するよう求めた。ローリー博士は、「非常に説得力のあるビデオだった」と語っている。1月7日には、このビデオをイギリスと南アフリカの首相に送った。しかし、両首相からは何の連絡もなかった。

2021年1月13日、ローリー博士は自らの招集権を利用して、研究者、医師、患者支援者、政府のコンサルタントなど、世界を代表する20人の専門家による招待制のシンポジウムを開催し、彼女のメタ分析を検討し、COVID-19の予防と治療にイベルメクチンを使用することについて、エビデンスに基づく勧告を行った。彼女はこの会議を「British ivermectin Recommendation Development (BIRD)」研究と呼んだ。

The BIRD Recommendation on the Use of  
Ivermectin for Covid-19

**BIRD**  
British  
Ivermectin  
Recommendation  
Development





## COVID-19 へのイベルメクチン使用に関する BIRD 勧告（機械翻訳+微修正）

機械翻訳 + 微修正（誤訳あり） 下線強調は翻訳者によるもの 翻訳許可はとっていません（転載・引用に注意） 2021 年 2 月 20 日にイギリスのバースで開催された英国イベルメクチン推奨開発会議の議事録と結論である。謝辞 この英国イベルメクチン勧告開発（BIRD）パネルの勧告は、より

「テス・ローリーは、WHO がすべきことを正確に行った」とコリー博士は言う。

「彼女はすべての科学的証拠を徹底的に、オープンに、そして透明に検討したのです。」

この日の会議では、ローリー博士の迅速なメタレビューの各研究を検討し、即時展開を支持する証拠があることに合意した。閉会に先立ち、ローリー博士と科学委員会は、すべての科学文献についてコクラン式の本格的なメタレビューを行うことを約束した。緊急を要するため、1 月 14 日にはより大規模なグループで再会することが約束された。

一方、ローリー博士は、「Daily Mail」紙にメタレビューがリークされた2日後の1月6日に、アンドリュー・ヒル博士と電話で連絡を取った。彼女は、科学界の有力者たちがコクラン方式のメタレビューに協力することに合意したことを伝え、ヒル博士にも協力者として参加してほしいと提案した。彼女は、自分のデータをヒル博士と共有したいと申し出て、電話の後、ヒル博士にスプレッドシートを送ったのである。ローリー博士は、WHOで多くのコクラン・レビューを担当しており、研究データを体系的にレビューすることにかけては、世界でもトップクラスの専門家であることは疑いの余地がない。ローリー博士は、ヒルにコクラン・レビューの共著者として、1月13日に開催される次のBIRD会議に出席してほしいと誘った<sup>59</sup>。通常であれば、ヒル博士は、世界で最も権威のある研究者たちと共に、WHOのために専門的で確実なEvidence-to-Decisionフレームワークを作成するために、主著者としての役割を果たすこのチャンスに飛びつくべきだった。しかし、彼はそれには応じなかった。しかし、ローリー博士のスプレッドシートを見ることには同意してくれた。

ローリー博士とその同僚たちは、医学文献に掲載されているすべての研究を一から見直し、それぞれの研究に力点と偏りがいないかどうかを評価するというマラソンのような努力を始めた。そして、1月中旬に BIRD のメンバーだけで草稿を発表した。全員が、イベルメクチンを発売することが常識的なアプローチであると同意した。彼女はプロトコルをコクランに提出し、外部の科学的レビューを受けた。

コクラン共同計画は、1993年にイギリスと北欧の科学者たちによって設立されたもので、新薬の臨床試験で蔓延していた製薬業界の不正を取り締まることを目的としている。現在、コクラン共同計画は、3万人の独立した科学者と53の大規模な研究機関の連合体であり、規制機関に助言するために、証拠に基づく科学を用いて業界のデータを定期的にレビューすることを志願している60。コクランは、不正な医薬品開発試験の領域に、誠実さと標準化された科学的手法を取り戻すことを目指している。コクランは、エビデンスの評価に標準化されたパラメータと厳格な方法論を用います。コクランの審査員は、メタレビュー内の個々の研究の力を体系的に評価し、データを解釈してバイアスを特定して割り引き、各研究を「高」、「中」、「低」のいずれかの確実なエビデンスとして採点し、データを1つのメタレビューにまとめてもよいかどうかを判断する。



ローリー博士は、WHO がイベルメクチンを決定する際に、ヒル博士の研究と、McMaster 大学の「Together Trial」と呼ばれる別の研究に依存することを知っていた。マクマスター大学は、絶望的かつ救いようのない対立を抱えていた。

NIH は McMaster に 2020 年と 2021 年に 1,081,541 ドルを提供した 61。

McMaster 大学の別の科学者グループは当時、独自の COVID ワクチンの開発に取り組んでいたが、WHO がイベルメクチンを標準治療として推奨した場合、その努力は決して報われることはなかった。ビル&メリンダ・ゲイツ財団は、イベルメクチンや ヒドロキシクロロキン、その他の COVID 対策薬をブラジルなどでテストする大規模な「Together Trial」に資金を提供していた。評論家は、ゲイツとマクマスターの研究者たちが、イベルメクチンを失敗させるためにその試験を計画したと非難した。特に、この研究は、すでにイベルメクチンを多用している人々を対象としており、有効性を明らかに隠蔽する交絡変数（プラセボ投与者は市販のイベルメクチンを入手できる）を作り出していた。マクマスター大学の研究者は、IVM を積極的に推奨することで、自分たちの大学が何億もの損失を被ることになることを確実に知っているであろう。Together Trial の主催者は、ゲ

イツ氏の治験設計者であるエド・ミルズ氏であった。ミルズ氏は、製薬会社との間に大きな確執があり、悪名高い業界の生物学的研究者として知られている科学者である。

ローリー博士は、WHO ガイドラインを救済し、質の高い科学的研究を行うには、ミルズを説得して本格的なコクラン共同体のメタアナリシスを行うしかないと考えた。翌週、彼女はヒル博士と再び Zoom で話した。

このときの通話は録音されている。

最初にヒル博士と話したとき、ローリー博士は、ヒル博士がメタレビューで用いた手法には「深い欠陥」があり、ヒル博士にはシステマティックレビューやメタアナリシスを行う経験がないと結論づけていた。「私は、彼がこの仕事を任せられたことに驚きました」と述べている。

実際、1月13日の会話記録によると、ヒル博士はシステマティックレビューの要件をまったく理解していなかった。システマティックレビューでは、研究者は統一された基準で各研究を評価してスコアを付け、検出力と偏りのリスクを評価し、偏りのリスクが高い研究を除外する「感度分析」を行う必要がある。この種のレビューは、必然的に各参加研究の著者の信頼性を判断することになる。コク

ランの審査員は、審査対象となったすべての研究の共著者の仕事の質、誠実さ、偏見の可能性について、個々の能力や、各研究者に影響を与える可能性のある金銭的利益相反などに基づいて、厳しい判断を下す覚悟をしなければならない。しかし、ヒルは奇妙なことに、彼が蓄積した7つの研究のすべての著者の名前を、メタレビューの共著者リストに記載していたのである。

「これは、野球チームのキャッチャーにアンパイアを兼任してもらうのと同じことです。野球に精通している人であれば、そのようなミスはしないでしょう。ヒルは、著者を評価するはずでした。しかし、ヒルは彼らを協力者として扱ったのです。」

ローリー博士は、それはメタアナリシスとしては異例のことだとヒル博士に優しく伝えた、

「システマティックレビューを行う際には、通常、研究の著者を含めることはありません。独立していなければならないのです。」

ローリー博士は、ヒル博士の論文は、彼が評価しているはずの研究者を共著者として挙げていることに加えて、標準化されたプロトコルに従って証拠を体系的に評価しているふりをしていると説明している。このような欠陥があるため、

「WHO への臨床ガイドライン」としては全く役に立たないと説明している。さ

らに、ヒル博士のメタレビューでは、COVID 患者の死亡という 1 つの結果のみが取り上げられており、ヒル博士が分析した研究の基準や評価項目のごく一部に過ぎなかった。彼女はヒル博士にこう言った。

「メタ分析をしていない他のすべての結果があるときに、それだけをメタ分析をすることはありませぬ…。あなたは、（利用可能な証拠のほんの一部を使って）死亡という結果をメタ分析しただけで、『いや、もっと研究が必要だ』と言ったのです。」

ローリー博士はヒル博士に、彼自身の分析で圧倒的な効果が認められたイベルメクチンについて U ターンしたことを説明するよう求めた。彼女は丁寧に尋ねた。

「どうしてこんなことができるの？あなたは取り返しのつかない損害を与えています。」

ヒルは、スポンサーから圧力をかけられたため、「やっかいな状況にある」と説明した。ヒルは、リバプール大学のウイルス学者で、ビル・ゲイツやクリントン財団の顧問を務めている。彼は自分のスポンサーがユニットエイドだと言っていた。「ユニットエイド」は、BMGF とフランス、イギリス、ノルウェー、ブラジル、スペイン、韓国、チリなどのヨーロッパ諸国から資金提供を受けている準政府系のアドボカシー団体で、アフリカの貧困層に配布する医薬品を多国籍企業が

ら購入するための資金を各国政府に働きかける活動を行っている。製薬会社の特許権や知的財産権を保護することが主な目的のようであるが、これは後ほど説明するように、ビル・ゲイツ氏が最優先で取り組んでいることであり、製薬会社が迅速かつ全額を支払うことを保証するものである。資金の約 63%は航空券の増税で賄われている。

ビル&メリンダ・ゲイツ財団は、ユニットエイドの理事会の議席と執行委員会の議長を務めており、BMGF は 2005 年以降、ユニットエイドに 1 億 5,000 万ドルを提供している 62。世界基金、Gavi、ユニセフなど、ゲイツが出資するさまざまな代理・フロント組織も、製薬業界と同様に貢献している。BMGF とゲイツは、この大げさな事業から利益を得ている多くの製薬会社の株式を個人的に大量に所蔵している。ゲイツ氏はユニットエイドを利用して、ヒル博士のような、飼いなされた妥協した研究者による不正な科学に資金を提供し、WHO への政策指示を正当化している。ユニットエイドは、ヒルの研究が発表される 4 日前に、アンドリュー・ヒルの雇用主であるリバプール大学に 4,000 万ドルを提供した。

博士号を持つヒルは、スポンサーが結論に影響を与えるよう圧力をかけていたと告白した。

ローリー博士が「誰があなたに影響を与えようとしているのですか？」と尋ねると、ヒル博士は「つまり、私はここでは非常に微妙な立場にいると思います...」

#### **ローリー博士**

「多くの方が微妙な立場にいます。病院やICUで死にかけていて、この薬を必要としているのです。」

#### **ヒル博士**

「さて...」

#### **ローリー博士**

「これが私には理解できないことなのですが、あなたは臨床医ではありませんよね。あなたは毎日死んでいく人々を見ているわけではありません。そして、この薬は80%の死を防ぐことができます。つまり、イベルメクチンがあるから、今死んでいる人の80%は死ぬ必要がないのです。」

#### **ヒル博士**

「先ほど言ったように、この件に関しては様々な意見があります。私が言うように、ある人は単純に...」

## ローリー博士

「私たちはデータを見ているのであって、他の人がどう言おうと関係ありません。他の人が何と言おうと、私たちはデータを見て、この安価で効果的な治療法が命を救うということを皆に確信させることを使命としています。それは明らかです。誰かがこう言った、誰かがこう言ったと言う必要はありません。これは決定的に明白なことです。今日、命を救うことができます。政府にイベルメクチンを買ってもらうことができれば。」

## ヒル博士

「まあ、そんなに単純な話ではないと思いますよ、だって試験があるじゃないですか...」

## ローリー博士

「それくらい単純なことです。研究を待つ必要はありません……イベルメクチンが命を救い、入院を防ぐことを示す十分な証拠が今あるのです。臨床スタッフが毎日仕事に行き、感染することはありません。率直に言って、あなたがその決定に責任を持たないことにショックを受けています。」

そして、誰があなたに影響を与えているのか、まだ私に話していません。誰があなたにその意見を与えているのでしょうか？なぜなら、あなたは自分が微妙な立場にいると言い続けているからです。

もしあなたが何かのためにお金をもらっていて、あるシナリオを支持するように言われているとしたら、それは微妙な立場だと思います。そうすると、この支払いを受けるべきかどうかを判断しなければなりません。なぜなら、実際には、自分の誤った結論が人々を傷つけることになるからです。実際には、自分の誤った結論が人々を傷つけることがわかっているからです。

ですから、『私はこの件でお金をもらうつもりはありません』とあなたは言う必要があるかもしれません。私は証拠を見ることができるので、コ克蘭・チームの全員がボランティアであるように、私もボランティアとしてコ克蘭・チームに参加するつもりです。誰もこの仕事でお金を受け取っていないのですから。」

### **ヒル博士**

「基本的には、生存率の向上については、同じ結論に達していると思います。どちらも生存率に有意な効果を見出しています」。

### **ローリー博士**

「いいえ、私は自分の証拠を評価しています。私は、この証拠に確信があると言っているのです。死を防ぐことに絶対の自信があると言っているのです。この治療法ほど効果的なものはありません。何を渋っているんですか？それは誰の結論ですか？」

続いてヒルは、外部の人間に影響されていると再び訴える。

### **ローリー博士**

「あなたは他人のことを言い続けていますね。まるで自分を信用していないようですね。もしあなたが自分を信頼していたら、心の中ではこの治療法が死を防ぐことを知っているのに、間違いを犯していて、それを正さなければならないとわかるはずですよ。」

### **ヒル博士**

「そうですね、今のデータでは薬が承認されないのは事実ですね。」

### **ローリー博士**

「でも、アンディ、このことはいずれ明らかになるわよ。国民に真実が語られることや、証拠が提示されることに対して、これらの障壁があったことが明らかになるでしょう。ですから、どうかこの機会に、あなたのレビューで（真実を）認

め、結論を変えて、決定的なものとなるこのコクラン・レビューに参加してください。このレビューは決定的なものになるでしょう。水曜日の夜に行われた20人の専門家による会議では、これがコンセンサスでした。」

ヒルは、NIHがIVMを推奨することに同意しないと抗議する。

**ローリー博士**

「ええ、NIHはワクチンロビーに所有されていますから。」

**ヒル博士**

「それは私が知っていることではありません。」

**ローリー博士**

「ええ、私が言いたいのは、これは汚職の匂いがして、あなたは遊ばれているということです。」

**ヒル博士**

「そうは思いません」

**ローリー博士**

「それでは、あなたには言い訳の余地がありません。急ぎすぎです。適切にまとめられていません。」

ローリー博士は、ヒル博士の研究は、患者に影響を与える多くの臨床結果を無視していると指摘する。予防としてのIVMの有益な効果、PCR陰性化までのスピードに対する効果、人工呼吸の必要性、ICUへの入院の減少など、臨床的に意味のある成果を無視していると、ヒル博士を叱咤している。

「これは悪い研究です。だから、今の時点では、私にはわからない……あなたはいい人のように見えるけど、私は本当に、あなたのことが心配なのです。」

### **ヒル博士**

「わかりました、ええ、つまり、これは難しい状況です。」

### **ローリー博士**

「いいえ、あなたは難しい状況にあるかもしれません。私はそうではありません、なぜなら私には支払者がいないからです。私は真実を語ることができます。わざと台無しにしようとするなんて……。」

### **ヒル博士**

「台無しにしているわけではありません。混乱させているのではなく、もう少し研究を検討するための時間が必要だと言っているのです。」

### **ローリー博士**

「では、いつまで人々を不必要に死なせ続けるのか、それはあなた次第です。あなたが許可したタイムラインは何ですか？」

### **ヒル博士**

「そうですね、私は……これは WHO、NIH、FDA、EMA が決めることだと思います。そして、彼らが十分だと思うときには、彼らが判断しなければなりません」

### **ローリー博士**

「彼らはどうやって決めるのですか？なぜなら、優れたエビデンスの統合をしてくれる人はいないからです。」

### **ヒル博士**

「それと同時に、他の試験でも結果が出てくるでしょうから、運が良ければその結果にたどり着けるでしょう。そして、私たちがそこに参加します。」

## ローリー博士

「すでに結論は出ています」。

## ヒル博士

「いや、それは WHO や FDA の見解ではありません」

## ローリー博士

「あなたはむしろ…多くの人々の命を危険にさらしたいのですね。もしあなたと私が一緒にこの問題に立ち向かえば、私たちは一致団結して、この問題を解決することができます。私たちはそれを実現できる。命を救うことができます。（英国国民保健サービスの医師や看護師が）人々が感染するのを防ぐことができます。お年寄りが死ぬのを防ぐことができます」

「これらは、世界中のいくつかの国で行われた研究です。そして、どれも同じことを言っています。さらに、効果があることを示すさまざまな証拠もあります。無作為化比較試験がすべてである必要はありません。

しかし、無作為化比較試験に基づいても、イベルメクチンが有効であることは明らかです……死亡を防ぎ、有害事象を防ぎ、人々の転帰を改善します……。好むと好まざるとにかかわらず、また認めると好まざるとにかかわらず、あなた方に

は議題があるので、私たちはどこにも行けないのです。そして、その意図とは、この問題を可能な限り先に進めることです。だから……私たちは命を救おうとしているのです。それが私たちの仕事です。

私は医者であり、できる限り多くの命を救いたいと思っています。そして、イベルメクチンについてのメッセージを伝えることで、それを実現しようと思っています。..そうですね。残念ながら、あなたの仕事はそれを妨げることになるでしょう。

あなたは多くの死の重荷を背負うことができるようですが、私にはそれができません」。

そして、彼女は再び尋ねる。

### **ローリー博士**

「教えてくれませんか？誰がWHOを通じてあなたにコンサルタント料を支払っているのか知りたいのです。」

### **ヒル博士**

「ユニットエイドです。」

### ローリー博士

「わかりました。では、誰が支援したのでしょうか…。？あなたが行ったレビューの結論は誰のものですか？著者として記載されていないのは誰ですか？実際に支援したのは誰ですか？」

### ヒル博士

「そうですね、つまり、私はそこにはあまり立ち入りたくないのですが、つまり… …ユニットエイド… …」

### ローリー博士

「私が思うに…それを明確にする必要があります。あなたの論文の中で、知られていない他の声が誰なのか、知りたいです。ユニットエイドは発言権を持っていますか？彼らはあなたが書くものに影響を与えているのでしょうか？」

### ヒル博士

「ユニットエイドは論文の結論について発言権を持っています。ええ。」

### ローリー博士

「Okay.では、ユニットエイドの中の誰ですか？あなたの証拠に意見を言っているのは誰ですか？」

**ヒル博士**

「まあ、そこにいる人たちだけです。私は……」

**ローリー博士**

「では、彼らがあなたの結論に口を出しているのですね。」

**ヒル博士**

「ええ、」

**ローリー博士**

「私の証拠を共有して、彼らに理解してもらえるように説得したいので、ユニットエイドの誰かと話ができる人の名前を教えてくださいませんか？」

**ヒル博士**

「ああ、誰の名前を教えればいいのか考えてみます。…。しかし、これは非常に難しいことです。なぜなら、私はこの論文を作成するという役割を担っており、私たちは非常に困難でデリケートなバランスの中にいるからです……」

**ローリー博士**

「この人たちは誰ですか？これを言っている人たちは誰なんですか？」

## ヒル博士

「ええ……とても強力なロビーです……」

## ローリー博士

「わかりました。あなたはたくさんの言い訳をしているようですが、それは悪い研究のやり方を正当化するためです。アンディ、この件については本当に申し訳ないと思っています。あなたは自分の結論に完全に満足しているわけではないことを、言葉や身振り手振りではっきりと私に説明してくれました。

そして、あなたにお金を払い、基本的にあなたのために結論を書いてくれた人たちを含め、あなたに影響を与えている人たちがいるために、あなたは難しい立場にいるのです。」

## ヒル博士

「私が難しい立場にいることを理解していただきたい。私は中立的な立場を模索していますが、それは非常に難しいことです」。

## ローリー博士

「ええ、中立的、中立的というのは中立的ではありません…あなたは、人を殺すような更なる裁判を求めるといふ極端な立場をとっています。だから、これは公表され、あなたは罪を負うことになるでしょう。

なぜなら、証拠があるのに、あなたはそれを否定しているだけでなく、あなたの仕事は実際に真実を明らかにすることを妨げているからです。そしてこれは明らかになるでしょう。だから、本当に申し訳ないけど、..前にも言ったように、あなたはいい人に見えるけど、どこかで欺かれているんだと思う」

ヒル博士は、彼女が6週間待ってくれるなら、イベルメクチンの承認を得るために全力を尽くすと約束した。

### **ヒル博士**

「私が望むのは、この膠着状態があまり長く続かないことです。ほんの数週間のことです。そして、できるだけ短い期間で終わるように働きかけることを保証します」。

### **ローリー博士**

「では、この膠着状態はどのくらい続くと思いますか？膠着状態を…継続させるために、あなたはどれくらいの期間、報酬を得られると思いますか？」

**ヒル博士**

「私の側から。わかりました …… 2 月末で、6 週間になると思います。」

**ローリー博士**

「毎日何人の人が死んでいるの？」

**ヒル博士**

「ああ、確かに、つまり、1 日に 1 万 5 千人です。」

**ローリー博士**

「1 日に 1 万 5 千人×6 週間。このペースだと、イギリスとアメリカ以外のすべての国がイベルメクチンを手に入れていることになります。なぜなら、イギリスとアメリカとヨーロッパはワクチンロビーに所有されているからです。」

**ヒル博士**

「私の目標は、この薬を承認して、最大限の効果が得られるように全力を尽くすことです…」

**ローリー博士**

「あなたはできる限りのことをしているわけではありません。なぜなら、あなたができる限りのことをするという事は、あなたにお金を払っている人たちに『これで死を防げることがわかった』と言うことです。『だから私はもうこの結論を支持するつもりはないし、真実を話すつもりだ』と言うことです。」

### **ヒル博士**

「私が責任を持ってやらなければならないのは、この薬が一日でも早く承認されるように、できるだけ多くのサポートを得ることです。」

### **ローリー博士**

「あなたがその結論を書いたやり方では、承認されることはないでしょう。あなたは実際に自分の足を撃ってしまったし、私たち全員の足を撃ってしまったのです。善良なことをしようとしている全ての人を。あなたはそれを完全に破壊してしまっただけです。」

### **ヒル博士**

「わかりました。ここで、私たちは意見の相違に同意しなければならないでしょうね。」

### **ローリー博士**

「ええ、正直なところ、あなたがどうしたら夜に眠れるのかわかりません。」

1月14日の BIRD 会議の締めくくりに、ローリー博士は医学史上最も重要なスピーチとして記録されるべき記念碑的な閉会の辞を述べた。ローリー博士は、自分が批判の対象とした機関に生活とキャリアを大きく依存しているため、かなりの個人的リスクを負って発言した。



ローリー博士はまず、IVM の奇跡的な有効性を支持した。

もし 2020 年に世界中の医療関係者が IVM の有効性を当局に報告した時に IVM が採用されていれば、何百万人もの命が救われ、パンデミックとそれに伴う苦しみや損失を迅速かつタイムリーに終わらせることができたはずである。

ローリー博士は、「イベルメクチンの弾圧は、製薬会社の腐敗が蔓延し、医療カルテルが患者や人類に敵対するようになったことを示すシグナルです」と聴衆に語った。

イベルメクチンの話は、我々が医学の歴史の中で驚くべき分岐点にいることを強調している。我々が治療のために使っている道具や、患者とのつながりが、企業の強欲さからくる容赦ない情報操作によって、組織的に損なわれているのである。

イベルメクチンの話は、我々国民が当局への信頼を見誤り、金と権力がどの程度腐敗するかを過小評価していたことを示している。

ローリー博士は、科学的証拠を分析するための方法の改革を求めた。

試験をデザインし、データをコントロールする者が、結果もコントロールする。

ですから、このような業界主導の試験制度は終わりにしなければならない。現在

行われている COVID の新規治療法の臨床試験や今後行われる臨床試験のデータは、

独立して管理・分析されなければならない。完全な透明性がなければ、信用できない。

ローリー博士は、大手製薬会社やその他の利害関係者による現代医療の腐敗を訴え、IVM の野蛮な抑圧は、より収益性の高いワクチンへの一途な執着によるものだとした。

それ以来、何億人もの人々が、人類史上最大の医療実験に参加しているのである。

集団予防接種は、証明されていない新しい治療法であった。何千億もの利益がビッグファーマによってもたらされ、その費用は国民が負担することになる。政治家や医療関係者ではない人たちが、病気の人に何を処方するかを決めているため、我々医師は、ヒポクラテスの誓いを守ることができない立場に置かれているのである。

彼女はゲイツの役割を示唆していた。

腐敗した組織、保健所、大手製薬会社、億万長者の社会的弱者に身代金を要求され続けるのか、それとも、我々のケアする人々に害を与えず、常に最善を尽くすという道徳的・職業的義務を果たすのか、この運命の岐路において、我々は選択しなければならない。後者には、世界中の同僚に緊急に連絡を取り、試してみた安全な旧来の医薬品のうち、どの薬が COVID に使用できるかを議論することが含まれる。

医師としての我々の役割がこれほどまでに重要になったことはない。

最後に、ローリー博士は、企業や億万長者ではなく、人々の利益を代表する、人々を中心とした新しい世界保健機関を設立することを医師たちに提案した。



## テス・ローリー博士の BIRD 会議での閉会挨拶

The Emotional Closing Remarks of the BIRD Conference by Dr. Tess Lawrie エビデンス・ベースド・メディスンの原則に沿ってエビデンスを提供することを使命とする科学者として、システムティック・レビューがエビデンス

\*\*\*

2021年10月1日、ヒルはツイッターに再登場し、皮肉なことに“Effects of Bias and Potential Medical Fraud in the Promotion of Ivermectin”（イベルメクチンのプロモーションにおけるバイアスと医療詐欺の可能性の影響）というタイトルの講演を行うことを宣伝した。ピエール・コーリー氏は、「アンドリュースは、イベルメクチンを支持する医師や科学者の医療詐欺を告発することを生業としているようです」と呆れている。コーリー博士は、「ヒルとその支援者たちは、人類の歴史上、最悪の人間だ。彼らは何百万人もの死に責任がある」と付け加えた。

\*\*\*

アンドリュー・ヒルの出現は、NIH と医療・メディアカルテルによる、医師の IVM 使用を阻止する戦争の一つの前線に過ぎない。FDA は 2020 年 4 月 10 日に、オーストラリアのモナシュとアメリカの医師ジャン・ジャック・ラジター博士によるイベルメクチンの研究に反応して、IVM に関する最初の警告を発し、ウェブサイトで「イベルメクチンがコロナウイルスまたは COVID-19 の予防または治療に安全または有効である可能性を判断するには、さらなる試験が必要です。」と主張した。

コーリー博士が 2020 年 12 月 8 日に上院で行った爆発的な証言 63 で、イベルメクチンを支持する査読済みの科学について述べたところ、米国の医師からのイベルメクチンの処方箋が爆発的に増えた。アメリカ人は薬局で正規の処方箋を調合してもらっており、1 週間で最大 88,000 件の処方箋が発行された。



薬の効果の真実が広まり、Dr.ファウチらが COVID の有効な治療法を許すことができなくなっていたのである。何とかしなければならなかった。

政府は、この薬の使用を阻止するために積極的に動いた。12月24日、南アフリカ政府は、試験的にイベルメクチンの輸入を禁止した。YouTubeはすぐにコーリー博士の動画を削除し<sup>64</sup>、Facebookは彼をブロックした。そして2021年3月、米国FDA、欧州医薬品協会(EMA)WHOがCOVID-19へのイベルメクチンの使用を控えるよう勧告する声明を発表した。EMAは、全く使用すべきではないとしている。WHOは、ヒドロキシクロロキンの使用を中止する戦略と同様に、イベルメクチンの使用は臨床試験に限定すべきであるとしている(臨床試験の実施には高額のコストがかかり、NIH、NIAID、Gates、製薬会社の資金に依存しているため、その結果は容易にコントロールされる可能性がある)。FDAは、

「COVID-19の治療や予防にイベルメクチンを使用してはなりません」という、より厳格な指示を出した<sup>65</sup>。

FDAのガイドラインはこちらである。

FDAは、ヒトや動物におけるCOVID-19の予防や治療にイベルメクチンを使用することを許可または承認していない。イベルメクチンは、一部の寄生虫やアタマジラミによる感染症、酒さなどの皮膚疾患の治療を目的としたヒトへの使用が承認されている。

現在入手可能なデータでは、イベルメクチンが COVID-19 に対して有効であることは示されていない。人の COVID-19 の予防または治療のためのイベルメクチン錠剤を評価する臨床試験 66 が進行中である。

イベルメクチンの大量摂取は危険である。

医療従事者がイベルメクチンの処方箋を書いてくれた場合は、薬局などの合法的な供給元を通じて処方箋を記入し、処方通りに服用してほしい。

2021 年 7 月 28 日、ウォール・ストリート・ジャーナル紙の一面に「なぜ FDA は安全で効果的な薬を攻撃するのか」という見出しが掲載された 67。

ウォール・ストリート・ジャーナルの記事から 2 週間後の 2021 年 8 月 16 日、CDC は医師に IVM の処方を中止するよう命じた。2020 年 8 月 17 日、NIAID は、新型コロナウイルス対策としてイベルメクチンを使用することに反対する勧告を出した。2021 年 8 月 26 日、CDC は Health Alert Network を使って緊急警告を発信した 68。

2021 年 9 月上旬、FDA/CDC/NIAID に続いて、米国医師会 (AMA)米国薬剤師会 (AFFA)米国医療システム薬剤師協会 (ASHP) が、臨床試験以外で COVID にイ

ベルメクチンを処方することを直ちに中止するよう医師に呼びかけた 69。これらの影響力のある組織は、製薬業界の大盤振る舞いに大きく依存している。

2021年9月2日のMSNBC Tonightでは、クリス・ヘイズがAMAの会長であるジェラルド・ハーモン博士にインタビューし、AMAは現在、臨床試験以外ではイベルメクチンを処方しないよう医師に勧告していると述べた。ハーモン博士は、イベルメクチンがCOVID-19の治療薬としてFDAから「承認」されていないため、AMAがこのような前例のない措置を取っていると説明した。彼は、アメリカの医師が書く処方箋の30%までが、FDAによって承認されていない適応外使用であることに言及しなかった。AMAは、医師が患者を治療するために何を使っているのか、何を使ってはいけないのかを決定するのはFDAであるべきだという革新的な考え方を支持しながら、ビッグファーマの注射によって連鎖的に発生する傷害や死を無視した。従来、医師は、患者にリスクとベネフィットを説明する限り、FDAが承認した薬をどのような目的で処方しても無制限の権限を持っていた。それが突然、AMAとその産業界の後援者、そして拘束力のある規制当局が、患者を治療する医師の権限を制限しようと動き出したのである。FDAには医療行為を規制する権限はない。2020年10月にFDAの最後のコミッショナーであるスティーブン・ハーン（彼が去ってから誰もその役割に任命されていな

い) が指摘したように、適応外処方とは医師とその患者との間で行われるものである。

現在も続いているこの悲しいエピソードは、医師たちに期待される疑問を投げかけている。

- イベルメクチンは安全な薬なのか？
- 害を及ぼすことはないのか？
- イベルメクチンは安全なのか、害はないのか、COVID-19 の治療法が確立されていないのではないか。
- 治療する医師には、役に立つかもしれないと信じる理由のある薬を、特にその薬が害になると信じる理由がない場合に、試す自由があるのだろうか？

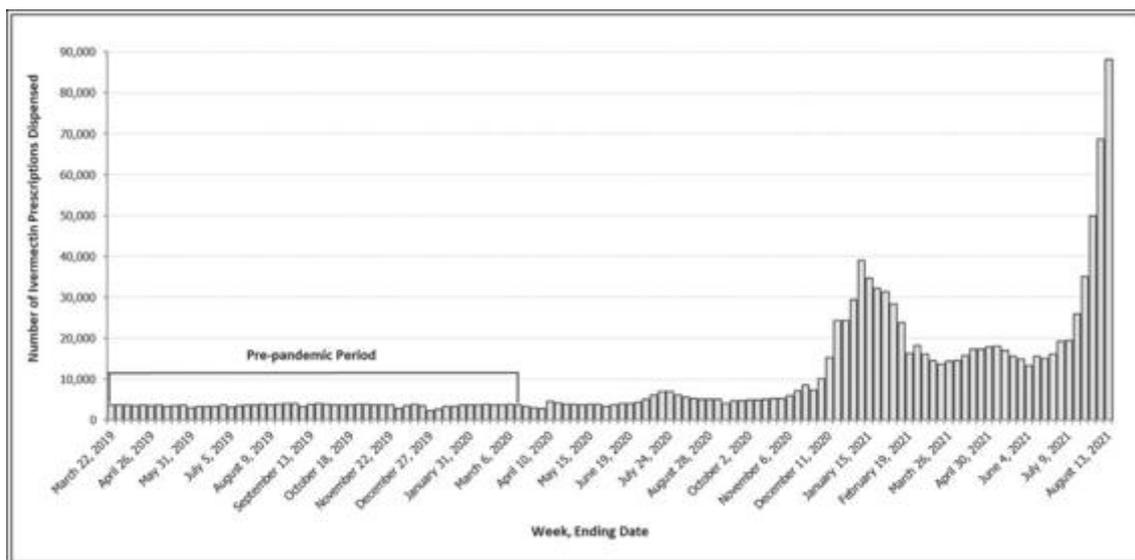
9 月上旬以降、これらの疑問に自ら答えてイベルメクチンを処方した医師たちは、政府や医療委員会からのモニタリングや、検閲、免許や認定証への脅迫、その他の抑圧的な政策など、強硬な手段に直面した。CVS やウォルマートなどの大手チェーン店を含む薬剤師たちは、処方箋の提出を拒否した。

「歴史上初めて、薬局が医師に処方できるものとできないものを指示したのです」

とマカロー博士は言う。この指令は、ヒポクラテス以来、医療従事者が育み、守ってきた医師と患者の伝統的な神聖な関係を打ち砕くものであった。医師の義務は患者に対するものであると、医師会は長年にわたり言い続けてきた。AMAの宣言は、医師を国家政策の代理人としての新たな役割に進ませた。国家政策とは、個々の患者の健康上の利益に基づいてではなく、国家の最善の利益と思われるものに基づいて治療法を処方することである。

「ヒドロキシクロロキンと IVM の弾圧は、現代における最大の悲劇と犯罪のひとつです」と、ピーター・ブレギン博士は私に語った。作家のキャンディス・パート氏から「精神医学の良心」と呼ばれているブレギン博士は、『Talking Back to Prozac』、『COVID-19 and the Global Predators』の著者である 70。

**小売薬局から調剤されたイベルメクチンの外来処方箋の推定数-米国 2019 年 3 月 16 日~2021 年 8 月 13 日\*。**



フロリダ州とサウスカロライナ州では、ブルークロス・ブルーシールド（BCBS）が医師に大量のメールを送り、BCBS が IVM に対する保険請求を払わなくなることを通知し、同薬の処方箋を書いた医師を監査すると脅した。

2021 年 1 月、ニューヨーク州シラキュースの弁護士ラルフ・ロリゴは、クライアントの母親である重篤な入院患者に代わって、イベルメクチンによる治療を求める家族の要求に抵抗していた地元の病院に対して、差し止め命令を申請した。州高等裁判所の判事は、ロリゴの要求を即座に認めた。瀕死の女性は、イベルメクチン投与後 12 時間で奇跡的に回復した。その 2 週間後、ロリゴは同様の状況にあるクライアントのために 2 度目の差し止め命令を獲得し、そのクライアントも奇跡的な回復を見せました。地元の報道機関がロリゴの IVM の勝利を報じると、彼の法律事務所の電話は鳴りっぱなしになった。数週間後には、瀕死の患者

がイベルメクチンを手に入れるよう、ニューヨーク州やオハイオ州の裁判所に差止命令を申請するという新たな家内工業に追いつこうと、1日20時間の労働をするようになっていた。ロリゴはこれまでに30件の裁判所に出向いている。

「私がイベルメクチンを間に合わせた人は全員生きているが、他の人は死んでしまった。」彼は患者のために何十件もの差止命令を出し、多くの突然の回復をもたらした。「病院はとても横柄である。病院は傲慢で、患者を見殺しにしている。病院は傲慢で、患者を見殺しにしている。」

## メルク社の赤ちゃん殺しの手順

ヒドロキシクロロキンに対する業界の初期の攻勢の中で、薬の主要メーカーの1つであるサノフィは、パンデミック前の数十年間の収益性の高い生産中には気づかなかったヒドロキシクロロキンの「安全性の懸念」を突然発見した。驚くべき偶然だが2021年2月4日、メルク社も同様にIVMに関する「大半の研究で安全性に関するデータが不足している」ことを発見した<sup>71</sup>。メルク社はイベルメクチンの元祖メーカーであり、かつてイベルメクチンを「驚異の薬」と自負していた。

メルク社はイベルメクチンの元祖メーカーであり、かつてイベルメクチンを「驚異の薬」と自負していた。1987年以降、メルク社は疥癬、河川盲目症 72,リンパ系フィラリア症、象皮病、各種寄生虫のために何十億回も開発途上国に投与してきたが、安全性の警告は出ていない。2016,メルク社はアフリカだけで9億回分の投与を行った。「この薬は安全で、副作用は軽微です」とメルクの広報担当者は当時語っていた。

深刻な、時には致命的な副作用があったこれまでの治療法とは異なり、イベルメクチンは安全で、広範囲に使用することができる。また、イベルメクチンは非常に効果的な治療法であり、何百万人もの人々の生活をたった一人で変えてきた。..  
なぜメルク社は突然、安全性を懸念したのか？

メルク社のイベルメクチンの独占特許権は 1996 年に失効し 73,現在では数十社のジェネリック医薬品会社が IVM を製造し、1回の投与で約 40 円で販売しており、メルク社にとってのイベルメクチンの利益は大幅に減少している。さらに、メルク社が IVM に関する懸念を発見するわずか 10 日前に、メルク社は Novavax 社と Emergent BioSolutions 社の COVID ワクチンの最終試験に向けた製造パートナーシップを締結した。

さらに 2020 年 12 月には、メルク社は 3 億 5600 万ドルの供給契約を発表しており、これによって NIAID は MK 7110 と呼ばれる実験的な COVID 錠剤を 6 万～10 万回分購入することに合意していた。メルクはこの取引の一環として、4 億 2500 万ドルを支払ってこの薬を開発したオンコイミューン社を買収した。ビル・ゲイツの準政府組織である国際エイズ・ワクチン・イニシアチブ (IAVI) は、発展途上国での製品の配布に同意した。

しかし、最も重要なことは、イベルメクチンは COVID-19 のためのもう一つのメルク社の新製品、つまりメルク社が最も高い財政的野心を持っていた高コストの抗ウイルス剤、モルヌピラビルにとって、利益率の低い競争相手でもあるということである。皮肉なことに、模倣品であるモルヌピラビルは、イベルメクチンと同じ作用機序を利用していた 74。この薬は 1 コースあたり 700 ドル程度で小売される 75 が、メルク社がその安価なライバルを殺すことができればの話である。

というのも、この薬は、COVID パンデミックの軍事化と収益化に重要な役割を果たしたスパイ、製薬会社のマウントバンク、バイオセキュリティのプロファイター、ペンタゴンの請負業者からなる影のブラックマーケットから生まれたものだからである。モルヌピラビルの重要な後援者の 1 人である CIA 職員で生物兵器開発者のマイケル・キャラハンは、この怪しい生物兵器オペレーターのグループ

を「秘密の握手クラブ」と呼んでいる。モルヌピラビルは、イベルメクチンの抗ウイルス作用を模倣したプロテアーゼ阻害剤である。イベルメクチンとは異なり、モルヌピラビルには非常に憂慮すべき安全性のシグナルがあるため、エモリー大学の開発者の一部は、ヒトの第1相試験への導入に抗議した。モルヌピラビルは、エモリー大学の開発者の中には、先天性異常を引き起こす可能性があるとして、第1相臨床試験への導入に反対した者もいる。

キャラハン氏の上司である生物兵器マニアの元厚生省準備・対応担当次官ロバート・カドック医学博士は、軍や諜報機関の血筋を引く「機能強化」を臆面もなく推進しており、大げさなパンデミックで利益を得ることでキャリアを築いてきた。また、カドックは NIH 内の超極秘の P3CO 委員会を運営しており、トニー・ファウチによる機能獲得型の生物兵器研究プロジェクトを承認し、決して否定しない。機能獲得とは、病原体を意図的に改変して、病気を引き起こしたり悪化させたり、感染性を高めたり、人間に世界的な広がりをもたらす可能性のある新種の病原体を作り出したりする実験のことである<sup>76</sup>。ワシントンの弁護士であり、ロビイストであり、巧みな悪党でもあるジョン・クレリシ<sup>77</sup>は、9.11 事件の後、トランプ政権下でカドックが長官を務めた HHS Office of the Assistant Secretary for Preparedness and Response (ASPR)の下に設立された新機関である The Biomedical Advanced Research and Development Authority (BARDA)を

ほぼ独力で設立した。BARDA は税金を投入した投資ファンドで、カドルクの戦略的備蓄品や想定される将来の脅威のための技術を購入・開発する。クレーシは、「誰かが BARDA の資金を得たいなら、私を通さなければならない」と自慢している。彼の LinkedIn のプロフィールには、「ジョンは 30 数社の企業を支援し、連邦政府の公衆衛生対策の開発と調達のための 30 億ドル近い資金と研究を獲得した。これには、生物学的攻撃に対する国家の準備のための米国政府のイニシアチブである Project BioShield の下で行われた賞の大半が含まれる」と書かれている。

この法律は、ワクチンをはじめとするパンデミック対策品の製造業者や提供者を訴訟から守るために、製造業者や提供者に賠償責任を免除するという企業福祉のための法案である。この法律は、ワクチンをはじめとするパンデミック対策製品の製造業者や提供者に、訴訟を起こさせないための責任回避策を与えるものである。この法律の下では、企業がどんなに過失や非難に値する行動を取っても、また被害者がどんなに悲惨な目に遭っても、被害者が故意の違法行為を証明しない限り、企業は責任を問われない。ただし、被害者が故意の違法行為を証明できない限り、企業は責任を負うことができない。その場合でも、訴訟を開始するには HHS 長官の承認が必要である。

国防脅威削減局（DTRA）78は2013年と2015年に1,000万ドルをエモリー大学に提供し、モルヌピラビルを馬用の動物用医薬品（馬脳炎対策）として開発させた。NIAIDは1,900万ドルを拠出し79,その後、メルク社ともうひとつの製薬会社リッジバック・バイオセラピューティクス社に、市場が保証された豊かなりターンとともに、毒薬を黄金のハンドオフで譲渡したのである。後の章で説明するように、DTRAはピーター・ダスザックの「慈善団体」であるエコヘルス・アライアンスの主要な出資者であり、世界中で致死性の動物ウイルスを探し出し、ペンタゴンのために最も致命的なものを回収していた。

2021年6月、FDAとNIAIDがIVMに対する医療カルテルの反発を強めていた頃、保健省はメルク社からモルヌピラビルの5日分の治療薬170万コースを12億ドルで購入することに合意した80-この薬がFDAの承認を得られれば、アンソニー・ファウチがワシントンの薬のキングメーカーである間は、事実上保証されたようなものだ。

2021年6月9日、バイデン大統領は、NIAIDが資金提供した薬剤をメルク社から約170万コース調達するという米国政府のコミットメントを忠実に再現した81。BARDAは、化学・生物・放射線・核防衛のための国防総省合同プログラム執行局（JPEO-CBRND）や陸軍契約司令部など、他の怪しい国防総省の組織と

協力して 12 億ドルの購入を行った。この薬は税金で開発されただけでなく、納税者への 1 回あたりの価格は 712 ドルで、メルク社の製造原価 17.64 ドルの 40 倍にもなる。この新しいブロックバスターで年間 70 億ドルの利益を期待しているメルク社は、政府との契約のニュースやバイデン大統領のテレビでの発言を受けて株価が急上昇した。

これだけ強力で重要なゴッドファーザーがいて、米国大統領が全面的にコミットしているのだから、臨床試験の結果がいかに悲惨なものであっても、FDA がモルヌピラビルの認可を拒否することは前代未聞である。メルク社は FDA の認可を確信しており 2020 年 9 月には、臨床試験がまだ進行中であるにもかかわらず、すでに製造規模を拡大している。

メルク社は 2021 年 10 月、モルヌピラビルが臨床試験で COVID に対して「ゲームを変える」結果を示し、入院や死亡をプラセボに対して 50%削減したと発表した。ホワイトハウスの首席医療顧問で製薬会社のスポークスマンであるアンソニー・ファウチは、「この抗ウイルス剤の有効性に関するニュースは、明らかに非常に良いニュースです」と切り出した。「FDA はデータを見て、通常の非常に効率的かつ効果的な方法で、可能な限り迅速にデータを評価し、そこから対応することになるであろう。」

## 馬用の薬

メルク社が馬用の新薬モルヌピラビルを市場に投入しようとしているとき、米国のもう一つの巨大企業であるファイザー社は、メルク社の抗ウイルス剤である PF-07321332 を競い合っていた 82。また、イベルメクチンのコピー品である PF-07321332 は、IVM と非常によく似ているため（もちろん価格は別だが）批評家たちは「ファイザメクチン」と呼んでいる 83。



この2つの新薬が同時に FDA に認可されることになったため、医療とメディアのカルテルは IVM に対して最終的に協調してクーデターを起こした。全米や海外の主要メディアは従順に馬の薬のプロパガンダ詐欺を宣伝する記事を掲載した。

2021年8月下旬、NIH、FDA、CDC は、イベルメクチンを「馬の駆虫薬」と誹謗中傷する革新的な新キャンペーンを開始した。これらのテーマを受けて、The Independent は、「Ivermectin: なぜ米国の反ワクチン派は、馬の駆虫薬を COVID の治療薬として売り込んでいるのか？」

Business Insider は、「馬の駆虫薬で COVID-19 を治療または予防しようとして、自分自身を毒している」と警告している。

AP 通信は、「イベルメクチンが COVID-19 に対する奇跡の薬であるという証拠はない」と読者に断言している。

8月15日、FDAはウェブサイトでこう指示した。「あなたは馬じゃない」2021年8月21日のツイッター投稿84で、FDAはテーマを拡大した。

「あなたは馬じゃない。あなたは牛じゃない。まじめな話、みんな。やめてくれ。」



ホワイトハウスやCNNも、動物用医薬品を避けるべきだとリスナーに呼びかけた。CDCも同様に、「馬用の駆虫剤」を飲んで健康を害することのないよう警告している。また、CDCのウェブサイトでは、黒人や褐色の人間の移民にイベルメクチンの摂取を促している。

「すべての中東、アジア、北アフリカ、ラテンアメリカ、カリブ海の難民は、米国に出発する前の2日間、イベルメクチンを1日1回、200mcg/Kgを2回経口投与する必要がある。」

健康に関するニュースや情報を提供するサイト Green Med Info だけが、この不正行為を見抜いていた。”A Media Smear Campaign Timinged to Clear Market for Pfizer’s Ivermectin Clone Drug, Which Will be Hailed as a ‘Miracle’.” (ファイザーのイベルメクチンクローン薬の市場を確保するためのメディアによる中傷キャンペーンで、この薬は「奇跡」と称されるだろう)。

NIAID が当初、メルク社の代替療法であるモルヌピラビルを馬用医薬品として開発していたことを考えると、IVM を「馬用医薬品」と悪者扱いするのは、もちろん皮肉なことである。さらに、イベルメクチンを馬の薬と呼ぶのは、抗生物質を馬の薬と呼ぶのと同じである。多くの長い歴史を持つ基礎薬は、共通の生物学に働きかけるため、もちろんすべての哺乳類に有効である。しかし、事実はともかく、メディア各社は総力を挙げてこのような記事を押しした。イベルメクチンは、寄生虫による感染症に壊滅的な効果を発揮し、40年に及ぶ確かな安全性が証明されているため、世界で最も処方されている動物用医薬品でもあるが、ノーベル賞は人間を何十億回も助けたことに対するものであり、政府の愚かな安全警告は、もちろん根拠のないものであった。

イベルメクチンの安全性の記録を、Dr.ファウチが選んだ COVID の 2 つの治療薬、レムデシビル（病院の看護師たちは「死が近づいている」と呼んでいる）と COVID ワクチンと比較してみよう。イベルメクチンは 30 年間で 379 件の死亡が報告されているが、これは 1/10,584,408 という驚異的な死亡/投与報告比である。一方、レムデシビルが EUA を取得してからの 1 年半の間に、約 150 万人の患者がレムデシビルを投与され、1,499 人の死亡が報告されている（悲惨な 1/1,000 の D/D 比です）。一方、米国で COVID jab が開始されてから 10 ヶ月間に接種された患者のうち、約 17,000 人がワクチン接種後に死亡しており、D/D 比は 1/13,250 であると報告されている。したがって、イベルメクチンは、レムデシビルや COVID ワクチンよりも何千倍も安全なのである。また、科学的にも、どちらよりもはるかに効果的であることがわかっている。

イベルメクチンがアメリカ人を蝕んでいるという噂を、Dr.ファウチ自身が早くから広めていた。2021 年 8 月 29 日のインタビューで、製薬会社のプロパガンダ担当者である CNN のジェイク・タッパーに「やめなさい」と言った。「この薬が効くという証拠は何もないし、とんでもない量を飲んでしまって病気になってしまい、毒物管理センターに行った人たちに毒性があるかもしれない。効果があることを示す臨床的な証拠はない」と述べている。



隔離事件が長引くにつれ、ジャーナリストというより製薬会社の担当者のような口調になってきたジェイク・タッパー氏は、Dr.ファウチの新しい論点を忠実にオウム返しした：86「毒物管理センターによると、ミシシッピ州やオクラホマ州などで通報が急増しているそうである。ミシシッピ州とオクラホマ州の当局が、州内でIVM中毒で入院した人がいることをすぐに否定したことは問題にならなかった。

AP通信の記事では、ミシシッピ州の毒物管理センターにかかってきた電話の70%がイベルメクチンの過剰摂取であったとされていたが、実際には2%程度であった。

さらに、他の州でもイベルメクチン関連の過剰摂取が増加しているとするニュース記事があった。これも誇張されたものだった。ケンタッキー州の毒物管理局は、獣医によるイベルメクチンの過剰摂取に関する通報がわずかに増加していることを認めている。大規模な中毒が発生しているという主張にもかかわらず、メディアはIVMによって死亡したり入院したりしたケースを1件も見つけることがで

きなかった。馬のイベルメクチンの過剰摂取で人々が死ぬことはなかったのである。また、適切に投与され処方されたイベルメクチンの経口投与で死ぬこともなかった。しかし、多くの人々が未治療の COVID-19 で死んでいたのである。

ビル・ゲイツ氏の代理団体である GAVI は、プレスリリースでこう問いかけた。”牛の寄生虫の治療に使われていた薬が、なぜ COVID-19 で人間を治療する医師の関心を引くようになったのか？”この特徴は特に不誠実なものであった。ゲイツ財団と GAVI はその時点で、インドの子供たちにはフィラリア症の治療に、アフリカの人々には河川盲目症とフィラリア症の治療に、毎年何百万回もイベルメクチンを配布していた。

攻撃されているのは、安全な薬や人道的医師だけではなかった。2021 年 9 月、人気コメディアンでポッドキャストの司会者であるジョー・ローガンが、イベルメクチンを含む複数の薬を使ってわずか数日で COVID を退治したと発表すると、世界中の報道機関、政府、製薬会社が一丸となって彼を非難し、中傷し、ガスライティングを行った。ビル&メリンダ・ゲイツ財団から 300 万ドルを受け取った NPR は、ローガンが馬レベルの量を摂取したと偽って、この犬の山に飛び込んできた 88。



ジョー・ローガンはインスタグラムのフォロワーに、コロナウイルスと戦うために、牛や馬に使用するために調合された駆虫用の動物用医薬品であるイベルメクチンを服用していると語った。食品医薬品局は、動物用のイベルメクチンを服用すると、吐き気や嘔吐、場合によっては重度の肝炎を引き起こす可能性があるとして、服用を控えるよう警告している。

しかし、ローガンは動物用イベルメクチンペーストを服用したことはない。ローガンは「複数の医師」と話をして、薬を飲むように勧められたという。ローガンは、複数の医師から薬を飲むようにアドバイスされ、そのアドバイスに従ったところ、驚くほど早く回復したという。

カウンターカルチャーの旗手であったローリング・ストーンは 2021 年には医療カルテルの正統派の信頼できる代弁者に成り下がっていた 89。また、ローリングストーン誌は、オクラホマの人々が馬の駆虫剤イベルメクチンを過剰摂取したために、救急病院が「非常に混雑しており、銃で撃たれた被害者が医療機関にアクセスするのに苦労している」と報じた。添えられた写真には、馬用の駆虫剤に

汚染された人々ですでに満員のオクラホマ州の救急病院に入院しようとする銃弾の犠牲者が長蛇の列を作っていると書かれていた 90。



このローリングストーン誌の記事 91 は、Daily Mail、92 Business Insider、Newsweek、93 Yahoo News、The Guardian、94 The Independent など、世界の主要なメディアの間で燎原の火のように広がった 95。MSNBC のニュース司会者であるレイチェル・マドローは、「オクラホマ州の田舎の病院や救急車に、イベルメクチンを過剰摂取した患者が押し寄せている」と視聴者に伝えた 96。

彼女は「イベルメクチンは実物大の馬に使うものである」と説明した。彼女は、被害者たちがまず、反ワクチン主義者の誤った主張をうのみにして、馬用の駆虫剤を飲み込んだと繰り返した。「ER は非常に混雑しており、銃で撃たれた被害者は、決定的な治療を受けられる施設にたどり着くのに苦労していた。」

もちろん、この話は詐欺だった。その数日後、オクラホマ州のセコイヤ・ノースイースタン・ヘルスシステムは、ウェブサイトにも明確な否定のコメントを掲載し、

この話は単なる捏造であると断じた。ローリングストーン誌に掲載された長蛇の列の写真は、AP通信が昨年1月に撮影したストックフォトで、ワクチン接種のために列に並んでいる人々の写真だった。結局のところ、オクラホマ州ではイベルメクチンの過剰摂取で治療を受けた患者は1人もいなかった。

『ローリングストーン』誌は、記事を撤回する代わりに、病院側の否定を伝える「アップデート」を記事の上部に掲載して注目を集めただけだった97。

FDAは、IVMが「深刻な害」をもたらす可能性があり、「強い毒性」があり、「痙攣」、「昏睡」、さらには「死」を引き起こす可能性があるという主張を倍にして伝えた99。

後述するように、この種の警告はCOVID注射にはるかに当てはまる。CDCは2021年8月26日、医師や薬剤師にイベルメクチンを処方しないように警告する緊急メモを発表した100。

モルヌピラビルのデビューが近づくにつれ、IVMとの戦いはエスカレートしていった。9月23日、コロラド州法務省は、「イベルメクチンの効果を誇張して販売した」として、ラブランドの医療クリニックに停止命令と4万ドルの罰金を科した。それでもイベルメクチンを調剤しようとする薬剤師は、新たな問題に直面

した。卸売り業者は、一度に数錠ずつ薬を出し始めたが、1週間に1回の処方にも足りなかったのだ。意図的に命を救う薬を弾圧する政策を実行した明確な責任を負う企業や連邦機関はなく、彼らの極悪非道なトリックはすべて、ウィンクやうなずき、強力な隠し手の仕業に見えた。

9月28日、ニューヨーク・タイムズ紙は新たな戦術を導入した。COVIDを治療しようとするクラックポットの間でイベルメクチンの需要が高まり、獣医用のイベルメクチンが不足していると報じ、今にも動物たちが苦しみ始めるかもしれないと警告したのだ<sup>101</sup>。



イベルメクチンは、寄生虫やウイルス感染に対して、複数の経路や作用機序で奇跡的な効果を発揮する分子である。それは分子である。馬に使おうが、牛に使おうが、人間に使おうが関係ない。物理学や化学のルールは、種を超えて同じなのである。

Pierre コーリー博士氏も同意見である。

イベルメクチンには複数の特性がある。イベルメクチンには複数の特性があり、COVID に対して多くの異なる経路で作用する。抗寄生虫作用に加えて、強力な抗ウイルス作用があり、さらには「SARS-CoV-2 のスパイクによるタンパク質の損傷を防ぐ」ことができる。

ジョセフ・マコーラ博士は次のように述べている 102。

イベルメクチンは馬の駆虫薬であり、人間に致命的なリスクをもたらすという考えは、COVID-19 に対して安全で効果的な薬を使うことを思いとどませようとする、純粋な馬の糞です。... その意図は明らかです。いわゆる保健機関やメディアがやろうとしていることは、イベルメクチンを「動物用医薬品」として人々を混乱させようとしていることですが、これは単に真実ではありません。結局のところ、彼らがやろうとしていることは、「自由に使えるのは COVID 注射だけ」という大手製薬会社のシナリオを裏付けることなのです。

## 巻末資料

1. The Nobel Prize in Physiology or Medicine 2015, The Nobel Prize Press Release (Oct. 5, 2015), [www.nobelprize.org/prizes/medicine/2015/press-release/](http://www.nobelprize.org/prizes/medicine/2015/press-release/)
2. World Health Organization, “Executive summary: the selection and use of essential medicines 2021: report of the 23rd WHO Expert Committee on the selection and use of essential medicines,” WHO (Sep. 30, 2021), [www.who.int/publications/i/item/WHO-MHP-HPS-EML-2021.01](http://www.who.int/publications/i/item/WHO-MHP-HPS-EML-2021.01) にや
3. World Health Organization Model List of Essential Medicines—22nd List, WHO (2021), [apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/345533/WHO-MHP-HPS-EML-2021.02-eng.pdf](http://apps.who.int/iris/bitstream/handle/10665/345533/WHO-MHP-HPS-EML-2021.02-eng.pdf)
4. Andy Crump and Satoshi Ōmura, “Ivermectin, ‘Wonder drug’ from Japan: the human use perspective,” Proceedings of the Japan Academy, Series B, (Feb 10, 2011), [www.ncbi.nlm.nih.gov/labs/pmc/articles/PMC3043740/](http://www.ncbi.nlm.nih.gov/labs/pmc/articles/PMC3043740/)
5. Fatemeh Heidary and Reza Gharebaghi, Ivermectin: a systematic review from antiviral effects to COVID-19 complementary regimen, The Journal of Antibiotics (June 12, 2020), [www.nature.com/articles/s41429-020-0336-z](http://www.nature.com/articles/s41429-020-0336-z)
6. “Lab experiments show anti-parasitic drug, Ivermectin, eliminates SARS-CoV-2 in cells in 48 hours.” Monash Biomedicine Discovery Institute (April 3,

2020), [www.monash.edu/discovery-institute/news-and-events/news/2020-articles/Lab-experiments-show-anti-para](http://www.monash.edu/discovery-institute/news-and-events/news/2020-articles/Lab-experiments-show-anti-para)

7. Ibid.

8. Juan Chamie-Quintero et al., “Ivermectin for COVID in Peru: 14-fold reduction in nationwide excess deaths,  $p < 0.002$  for effect by state, then 13-fold increase after ivermectin use restricted,” OSF Preprints (March 8, 2021), [osf.io/9egh4/](https://osf.io/9egh4/)

9. Hector Carvallo, et al., “Study of the Efficacy and Safety of Topical Ivermectin + IotaCarrageenan in the Prophylaxis against COVID-19 in Health Personnel,” Journal of Biomedical Research and Clinical Investigation V. 2 | 1 at 1007 (Nov. 17, 2020), [www.medicalpressopenaccess.com/single\\_article.php?refid=82](http://www.medicalpressopenaccess.com/single_article.php?refid=82) にゃ

10. Alam et al., “Ivermectin as Pre-exposure Prophylaxis for COVID-19 among Healthcare Providers in a Selected Tertiary Hospital in Dhaka—An Observational Study,” European Journal of Medical & Health Sciences, Vol. 2 No. 6 (Published December 15, 2020).

11. AD Santin, et al., “Ivermectin: a multifaceted drug of Nobel prize-honoured distinction with indicated efficacy against a new global scourge,” 43:100924

New Microbes New Infect (Aug. 3, 2021) doi:

10.1016/j.nmni.2021.100924, [pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/34466270/](https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/34466270/)

12. Statement to U.S. Committee on Homeland Security and Governmental Affairs: “Early Outpatient Treatment: An Essential Part of the COVID-19 Solution,

Part II.” THE ICON STUDY: Dr. Jean-Jacques Rajter Reviews Ivermectin, Hope

Pressworks (January 18, 2021), [hopepressworks.org/f/the-icon-study-dr-jean-](https://hopepressworks.org/f/the-icon-study-dr-jean-jacques-rajter-reviews-ivermectin)

[jacques-rajter-reviews-ivermectin](https://hopepressworks.org/f/the-icon-study-dr-jean-jacques-rajter-reviews-ivermectin)

13. Alam et al., “Ivermectin as Pre-exposure Prophylaxis for COVID-19 among

Healthcare Providers in a Selected Tertiary Hospital in Dhaka—An

Observational Study,” Alam et al., European Journal of Medical & Health

Sciences, Vol. 2 No. 6 (Published December 15,

2020), [www.ejmed.org/index.php/ejmed/article/view/599](http://www.ejmed.org/index.php/ejmed/article/view/599) にや

14. Peter A. McCullough et al., “Multifaceted highly targeted sequential

multidrug treatment of early ambulatory high-risk SARS-CoV-2 infection

(COVID-19),” Reviews in Cardiovascular Medicine, 2020, Vol. 21 Issue (4): 517-

530 [rcm.imrpress.com/EN/10.31083/j.rcm.2020.04.264](https://rcm.imrpress.com/EN/10.31083/j.rcm.2020.04.264) にや

15. [Ivermectinforcovid.com](https://ivermectinforcovid.com), “A Letter to NIH and Dr. Anthony Fauci. Is Anybody Home?,” Ivermectin for COVID (Mar. 4, 2021), [ivermectinforcovid.com/a-letter-to-nih-and-dr-anthony-fauci-is-anybody-home/](https://ivermectinforcovid.com/a-letter-to-nih-and-dr-anthony-fauci-is-anybody-home/)

16. C. Bernigaud et al., “Bénéfice de l’ivermectine: de la gale à la COVID-19, un exemple de sérendipité,” Annales de Dermatologie et de Vénérologie (December, 2020), [www.sciencedirect.com/science/article/abs/pii/S015196382030627X?via%3Dihub](https://www.sciencedirect.com/science/article/abs/pii/S015196382030627X?via%3Dihub)

17. C. Bernigaud et al., “Ivermectin benefit: from scabies to COVID-19, an example of serendipity,” Annals of Dermatology and Venereology (December, 2020), [c19ivermectin.com/bernigaud.html](https://c19ivermectin.com/bernigaud.html)

18. Choudhury, Abhigyan et al., “Exploring the Binding Efficacy of Ivermectin against the Key Proteins of SARS-CoV-2 Pathogenesis: An in Silico Approach,” Future Virology (March 25, 2021), [www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC7996102/](https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC7996102/)

19. Peter A. McCullough et al., “Early Ambulatory Multidrug Therapy Reduces Hospitalization and Death in High-Risk Patients with SARS-CoV-2 (COVID-19),”

Vol. 6 No. 03 (March, 2021) | Page No.: 219–221 にゃ

20. “FLCCC Alliance Invited to the National Institutes of Health (NIH) COVID-19 Treatment Guidelines Panel to Present Latest Data on Ivermectin,” Press Release, Front Line COVID-19 Critical Care Alliance (FLCCC) (January 7, 2021), [covid19criticalcare.com/wp-content/uploads/2021/01/FLCCC-PressRelease-NIH-C19-Panel-FollowUp-Jan7-20](https://covid19criticalcare.com/wp-content/uploads/2021/01/FLCCC-PressRelease-NIH-C19-Panel-FollowUp-Jan7-20)

21. Dr. Andrew Hill, “Covid-19: WHO-sponsored preliminary review indicates Ivermectin effectiveness,” Dr. Andrew Hill, Swiss Policy Research (December 31, 2020), [swprs.org/who-preliminary-review-confirms-ivermectin-effectiveness/](https://swprs.org/who-preliminary-review-confirms-ivermectin-effectiveness/)

22. Carlos Chaccour, “The effect of early treatment with ivermectin on viral load, symptoms and humoral response in patients with non-severe COVID-19: A pilot, double-blind, placebo-controlled, randomized clinical trial,” EClinical Medicine Published by the Lancet, (Jan 19, 2021), [www.thelancet.com/journals/eclinm/article/PIIS2589-5370\(20\)30464-8/fulltext](https://www.thelancet.com/journals/eclinm/article/PIIS2589-5370(20)30464-8/fulltext)

23. Pierre Kory, et al., “Review of the Emerging Evidence Demonstrating the Efficacy of Ivermectin in the Prophylaxis and Treatment of COVID-19,” Front Line COVID-10 Critical Care Alliance (Jan 16, 2021), [...](#)

[covid19criticalcare.com/wp-content/uploads/2020/11/FLCCC-Ivermectin-in-the-prophylaxis-and-treatment](https://covid19criticalcare.com/wp-content/uploads/2020/11/FLCCC-Ivermectin-in-the-prophylaxis-and-treatment)

24. “Dr. Pierre Kory, president of the FLCCC Alliance testifies before Senate Committee on Homeland Security and Governmental Affairs looking into early outpatient COVID-19 treatment,” Press release, Front Line COVID-19 Critical Care Alliance (FLCCC) (December 8, 2020), [...](#)

[www.newswise.com/coronavirus/dr-pierre-kory-president-of-the-flccc-alliance-testifies-before-senate-](https://www.newswise.com/coronavirus/dr-pierre-kory-president-of-the-flccc-alliance-testifies-before-senate)

25. Pierre Kory et al., “Clinical and Scientific Rationale for the “MATH+” Hospital Treatment Protocol for COVID-19,” Journal of Intensive Care Medicine (December 15, 2020), [journals.sagepub.com/doi/10.1177/0885066620973585](https://journals.sagepub.com/doi/10.1177/0885066620973585) に

[や](#)

26. “One Page Summary of the Clinical Trials Evidence for Ivermectin in COVID-19,” Front Line COVID-19 Critical Care Alliance (FLCCC) (January 11, 2021), [...](#)

[covid19criticalcare.com/wp-content/uploads/2020/12/One-Page-Summary-of-the-Clinical-Trials-Evidence-](https://covid19criticalcare.com/wp-content/uploads/2020/12/One-Page-Summary-of-the-Clinical-Trials-Evidence-)

27. Testimony by Dr. Pierre Kory to the U.S. Senate Committee on Homeland Security and Governmental Affairs (2020), Front Line COVID-19 Critical Care Alliance (FLCCC), [covid19criticalcare.com/senate-testimony/](https://covid19criticalcare.com/senate-testimony/)

28. “FLCCC Alliance Invited to the National Institutes of Health (NIH) COVID-19 Treatment Guidelines Panel to Present Latest Data on Ivermectin,” Press Release, Front Line COVID-19 Critical Care Alliance (FLCCC) (January 7, 2021), [covid19criticalcare.com/wp-content/uploads/2021/01/FLCCC-PressRelease-NIH-C19-Panel-FollowUp-Jan7-20](https://covid19criticalcare.com/wp-content/uploads/2021/01/FLCCC-PressRelease-NIH-C19-Panel-FollowUp-Jan7-20)

29. Donato Paolo Mancini, “Cheap antiparasitic could cut chance of Covid-19 deaths by up to 75%,” The Financial Times (January 19, 2021), [www.ft.com/content/e7cb76fc-da98-4a31-9c1f-926c58349c84](https://www.ft.com/content/e7cb76fc-da98-4a31-9c1f-926c58349c84) にや

30. “NIH Updates its Position on Ivermectin,” COVEXIT: COVID-19 News & Policy Analysis (January 14, 2021), [covexit.com/nih-updates-its-position-on-ivermectin/](https://covexit.com/nih-updates-its-position-on-ivermectin/)

31. “Ivermectin is not approved by the FDA for the treatment of any viral infection,” National Institutes of Health COVID-19 Treatment Guidelines (Last Updated: February 11,

2021), [www.covid19treatmentguidelines.nih.gov/therapies/antiviral-therapy/ivermectin/](https://www.covid19treatmentguidelines.nih.gov/therapies/antiviral-therapy/ivermectin/)

32. Peter Yim, “Federal Judge Allows NIH Ivermectin Deception Case to Proceed.” Trial Site News (August 28, 2021), [trialsitenews.com/federal-judge-allows-nih-ivermectin-deception-case-to-proceed/](https://trialsitenews.com/federal-judge-allows-nih-ivermectin-deception-case-to-proceed/)

33. National Institutes of Health email from Safia Kuruiakose, PharmD to partially redacted list of recipients (January 5, 2021). Email was obtained via Freedom of Information Act. [drive.google.com/file/d/1qh9U0FvrF-INnNyuZ9\\_ljPS8PCXpAdzR/view?usp=sharing](https://drive.google.com/file/d/1qh9U0FvrF-INnNyuZ9_ljPS8PCXpAdzR/view?usp=sharing)

34. National Institutes of Health email from Andy Pavia to Dr. Susanna Naggie, M.D., and Cc: Safia Kuruiakose, PharmD and partially redacted list of recipients (January 6, 2021). Email was obtained via the Freedom of Information Act. [drive.google.com/file/d/18OfEy2byeYQBxY\\_xRuQjgmwtRS8m23zu/view?usp=sharing](https://drive.google.com/file/d/18OfEy2byeYQBxY_xRuQjgmwtRS8m23zu/view?usp=sharing)

35. “Large clinical trial to study repurposed drugs to treat COVID-19 symptoms,” National Institutes of Health news release (April 19, 2021), [www.nih.gov/news-events/news-releases/large-clinical-trial-study-repurposed-drugs-treat-covid-19-sym](https://www.nih.gov/news-events/news-releases/large-clinical-trial-study-repurposed-drugs-treat-covid-19-sym)

36. TrialSite News staff, "Chairman of Tokyo Metropolitan Medical Association Declares During Surge, Time for Ivermectin is Now," TrialSite News (August 16, 2021), [trialsitenews.com/chairman-of-tokyo-metropolitan-medical-association-declares-during-surge-time-for-](https://trialsitenews.com/chairman-of-tokyo-metropolitan-medical-association-declares-during-surge-time-for-)

37. TrialSite News staff, "Ivermectin Authorized in Indonesia as Pharma Issued License for Production to Battle COVID-19," TrialSite News (June 24, 2021), [trialsitenews.com/ivermectin-authorized-in-indonesia-as-pharma-issued-license-for-production-to-batt](https://trialsitenews.com/ivermectin-authorized-in-indonesia-as-pharma-issued-license-for-production-to-batt)

38. World Tribune staff, "Media mum on India's Ivermectin success story; El Salvador offers it free to citizens," World Tribune (Sept. 19, 2021), [www.worldtribune.com/media-mum-on-indiasivermectin-success-story-el-salvador-offers-it-free-to-citiz](https://www.worldtribune.com/media-mum-on-indiasivermectin-success-story-el-salvador-offers-it-free-to-citiz)

39. Nick Corbishley, "As US Prepares to Ban Ivermectin for Covid-19, More Countries in Asia Begin Using It," Naked Capitalism (September 7, 2021), [www.nakedcapitalism.com/2021/09/as-us-prepares-to-ban-ivermectin-for-covid-19-more-countries-in-asia](https://www.nakedcapitalism.com/2021/09/as-us-prepares-to-ban-ivermectin-for-covid-19-more-countries-in-asia)

40. Rodrigo Guerrero et al., “COVID-19: The Ivermectin African Enigma,” Europe PMC, doi: 10.25100/cm.v51i4.4613 (December 30, 2020), [europepmc.org/article/PMC/PMC7968425](https://europepmc.org/article/PMC/PMC7968425) にや

41. Justus R. Hope, M.D., “Ivermectin obliterates 97 percent of Delhi cases,” The Desert Review (Jun 1, 2021 Updated Jun 7, 2021), [www.thedesertreview.com/news/national/ivermectin-obliterates-97-percent-of-delhi-cases/article\\_6a3be](https://www.thedesertreview.com/news/national/ivermectin-obliterates-97-percent-of-delhi-cases/article_6a3be)

42. Justus R. Hope, M.D., “Ivermectin crushes Delhi cases,” The Desert Review (May 18, 2021; updated September 8, 2021), [www.thedesertreview.com/opinion/letters\\_to\\_editor/ivermectin-crushes-delhi-cases/article\\_31f3afcc-b7](https://www.thedesertreview.com/opinion/letters_to_editor/ivermectin-crushes-delhi-cases/article_31f3afcc-b7)

43. See video at 6:58. However, the video is unavailable as of 9/25/2021. [youtu.be/pko4LldUQCI](https://youtu.be/pko4LldUQCI)

44. Bhuma Shrivastava and Malavika Kaur Makol, “Forecaster who predicted India’s COVID peak sees new wave coming,” Boston Globe (Aug 1, 2021), [www.bostonglobe.com/2021/08/01/business/forecaster-who-predicted-indias-covid-peak-sees-new-wave-com](https://www.bostonglobe.com/2021/08/01/business/forecaster-who-predicted-indias-covid-peak-sees-new-wave-com)

45. The Hindu Net Desk, "Coronavirus updates | January 1, 2021," The Hindu (Jan 1, 2021), [www.thehindu.com/news/national/coronavirus-updates-january-1-2021/article33469047.ece](http://www.thehindu.com/news/national/coronavirus-updates-january-1-2021/article33469047.ece)

46. Maria Caspani and Peter Szekely, "U.S. tops 21 million COVID-19 cases with record hospitalizations as states ramp up vaccinations," Reuters (Jan 6, 2021), [ph.news.yahoo.com/u-sets-covid-19-hospitalization-161111470.html](http://ph.news.yahoo.com/u-sets-covid-19-hospitalization-161111470.html)

47. Maulshree Seth, "Uttar Pradesh government says early use of Ivermectin helped to keep positivity, deaths low," The Indian Express (May 12, 2021), [indianexpress.com/article/cities/lucknow/uttar-pradesh-government-says-ivermectin-helped-to-keep-dea](http://indianexpress.com/article/cities/lucknow/uttar-pradesh-government-says-ivermectin-helped-to-keep-dea)

48. "Uttar Pradesh government says early use of Ivermectin helped to keep positivity, deaths low," MSN (May 12, 2021), [www.msn.com/en-in/news/other/uttar-pradesh-government-says-early-use-ofivermectin-helped-to-keep-pos](http://www.msn.com/en-in/news/other/uttar-pradesh-government-says-early-use-ofivermectin-helped-to-keep-pos)

49. "India State of 241 MILLION People Declared COVID-Free After Government Promotes Ivermectin," [Infowars.com](http://Infowars.com) (September 18, 2021), [www.infowars.com/posts/india-province-of-241-million-people-declared-covid-free-after-government-pro](http://www.infowars.com/posts/india-province-of-241-million-people-declared-covid-free-after-government-pro)

50. “33 districts in Uttar Pradesh are now Covid-free: State govt,” Hindustan Times, New Delhi (September 10, 2021), [...](#)

[www.hindustantimes.com/cities/lucknow-news/33-districts-in-uttar-pradesh-are-now-covid-free-state-go](http://www.hindustantimes.com/cities/lucknow-news/33-districts-in-uttar-pradesh-are-now-covid-free-state-go)

51. Justin R. Hope, “Ivermectin A Success In Indian States Where It Is Used,” Peckford 42 (Aug 22,

2021), [peckford42.wordpress.com/2021/08/22/ivermectin-a-success-in-indian-states-where-it-is-used/](http://peckford42.wordpress.com/2021/08/22/ivermectin-a-success-in-indian-states-where-it-is-used/)

52. Ibid.

53. Stefan J. Bos, “India’s Largest State Nearly COVID-Free After Using Alternative Drug,” Worthy News (Sept 13, 2012), [www.worthynews.com/61607-indias-largest-state-nearly-covid-free-after-using-alternative-drug](http://www.worthynews.com/61607-indias-largest-state-nearly-covid-free-after-using-alternative-drug)

54. Justus R. Hope, “India’s Ivermectin Blackout: Part II,” The Desert Review (Aug 13, 2021), [www.thedesertreview.com/news/national/indias-ivermectin-blackout-part-ii/article\\_a0b6c378-fc78-11eb-](http://www.thedesertreview.com/news/national/indias-ivermectin-blackout-part-ii/article_a0b6c378-fc78-11eb-)

55. Justus R. Hope, M.D., “Tamil Nadu leads India in new infections, denies citizens ivermectin,” The Desert Review (May 21, 2021/Updated Sep 8,

2021), [www.thedesertreview.com/opinion/letters\\_to\\_editor/tamil-nadu-leads-india-in-new-infections-denies-ci](http://www.thedesertreview.com/opinion/letters_to_editor/tamil-nadu-leads-india-in-new-infections-denies-ci)

56. [...](#)

[journals.lww.com/americantherapeutics/fulltext/2021/08000/ivermectin\\_for\\_prevention\\_and\\_treatment\\_of](http://journals.lww.com/americantherapeutics/fulltext/2021/08000/ivermectin_for_prevention_and_treatment_of)

57. Justus R. Hope, M.D., “Dr. Tess Lawrie: The Conscience of Medicine.” The Desert Review (May 4, 2021), [...](#)

[www.thedesertreview.com/opinion/letters\\_to\\_editor/dr-tess-lawrie-the-conscience-of-medicine/article\\_](http://www.thedesertreview.com/opinion/letters_to_editor/dr-tess-lawrie-the-conscience-of-medicine/article_)

58. Luke Andrews, “Cheap hair lice drug may cut the risk of hospitalized Covid patients dying by up to 80%, study finds,” Daily Mail (January 4, 2021), [...](#)

[www.dailymail.co.uk/news/article-9110301/Cheap-hair-lice-drug-cut-risk-hospitalised-Covid-patients-d](http://www.dailymail.co.uk/news/article-9110301/Cheap-hair-lice-drug-cut-risk-hospitalised-Covid-patients-d)

59. Dr. Tess Lawrie, “Who are the BIRD Group?,” BIRD (Jan. 2021), [bird-group.org/who-are-bird/](http://bird-group.org/who-are-bird/)

60. TrialSite News staff, “Are the Independent Actually Dependent? Is Cochrane’s Ivermectin Analysis Biased?” TrialSite News (May 6,

2021), [trialsitenews.com/are-the-independent-actually-dependent-is-cochrane-ivermectin-analysis-biased/](https://trialsitenews.com/are-the-independent-actually-dependent-is-cochrane-ivermectin-analysis-biased/)

61. National Institutes of Health, NIH Awards by Location and Organization, [report.nih.gov/award/index.cfm?ot=&fy=2021&state=&ic=&fm=&orgid=4997001&#03](https://report.nih.gov/award/index.cfm?ot=&fy=2021&state=&ic=&fm=&orgid=4997001&#03)

62. Unitaid Press Release, “Unitaid hails new US\$ 50 million contribution from the Bill & Melinda Gates Foundation,” Unitaid (Dec. 7, 2017), [unitaid.org/news-blog/unitaid-hails-new-us-50-million-contribution-bill-melinda-gates-foundation/#en](https://unitaid.org/news-blog/unitaid-hails-new-us-50-million-contribution-bill-melinda-gates-foundation/#en)

63. “Early Outpatient Treatment: An Essential Part of a COVID-19 Solution, Part II.” Testimony by Dr. Pierre Kory to U.S. Senate Homeland Security and Governmental Affairs Committee (December 8, 2020), [www.hsgac.senate.gov/early-outpatient-treatment-an-essential-part-of-a-covid-19-solution-part-ii](https://www.hsgac.senate.gov/early-outpatient-treatment-an-essential-part-of-a-covid-19-solution-part-ii)

64. U.S. Sen. Ron Johnson, “Google/YouTube censor Senate hearing on ivermectin and early treatment of Covid-19,” Wall Street Journal (February 4, 2021), [anthraxvaccine.blogspot.com/2021/02/googleyoutube-censor-senate-hearing-on.html](https://anthraxvaccine.blogspot.com/2021/02/googleyoutube-censor-senate-hearing-on.html)

65. “Currently available data do not show ivermectin is effective against COVID-19,” “Why You Should Not Use Ivermectin to Treat or Prevent COVID-19.” U.S. Food and Drug Administration (September 3, 2021), [www.fda.gov/consumers/consumer-updates/why-you-should-not-use-ivermectin-treat-or-prevent-covid-19](https://www.fda.gov/consumers/consumer-updates/why-you-should-not-use-ivermectin-treat-or-prevent-covid-19)

66. [ClinicalTrials.gov](https://www.clinicaltrials.gov), “Ivermectin COVID-19 Search Results,” [www.clinicaltrials.gov/ct2/results?cond=COVID-19&term=ivermectin&cntry=&state=&c](https://www.clinicaltrials.gov/ct2/results?cond=COVID-19&term=ivermectin&cntry=&state=&c)

67. David R. Henderson and Charles L. Hooper, “Why Is the FDA Attacking a Safe, Effective Drug?” Wall Street Journal (Jul 28, 2021)

68. Rapid Increase in Ivermectin Prescriptions and Reports of Severe Illness Associated with Use of Products Containing Ivermectin to Prevent or Treat COVID-19, Centers for Disease Control and Prevention (Aug 26, 2021), [emergency.cdc.gov/han/2021/han00449.asp](https://emergency.cdc.gov/han/2021/han00449.asp)

69. “AMA, APhA, ASHP statement on ending use of ivermectin to treat COVID-19.” Press Release, American Medical Association (September 1, 2021). [www.ama-assn.org/press-center/press-releases/ama-apha-ashp-statement-ending-use-ivermectin-treat-cov](https://www.ama-assn.org/press-center/press-releases/ama-apha-ashp-statement-ending-use-ivermectin-treat-cov)

70. “Psychiatric Drug Facts: What your doctor may not know,” COVID-19 and Coronavirus Resource Center, with Peter R. Breggin

MD, [breggin.com/coronavirus-resource-center/](https://breggin.com/coronavirus-resource-center/)

71. Merck, “Merck Statement on Ivermectin use During the COVID-19 Pandemic,” Merck (Feb. 4, 2021), [www.merck.com/news/merck-statement-on-ivermectin-use-during-the-covid-19-pandemic/](https://www.merck.com/news/merck-statement-on-ivermectin-use-during-the-covid-19-pandemic/)

72. Special to The New York Times, “Merck Offers Free Distribution of New River Blindness Drug,” New York Times (Oct. 22, 1987), [www.nytimes.com/1987/10/22/world/merck-offers-free-distribution-of-new-river-blindness-drug.html](https://www.nytimes.com/1987/10/22/world/merck-offers-free-distribution-of-new-river-blindness-drug.html)

73. Rick Speare and David Durrheim, “Mass treatment with ivermectin: an underutilized public health strategy,” Bulletin of the World Health Organization (Aug. 2004), [www.who.int/bulletin/volumes/82/8/562.pdf](https://www.who.int/bulletin/volumes/82/8/562.pdf)

74. Staff reporter, “Merck and AstraZeneca to start COVID-19 drug trials in Japan,” The Japan Times (Mar. 13, 2021), [www.japantimes.co.jp/news/2021/03/13/national/science-health/merck-astrazeneca-clinical-trials/](https://www.japantimes.co.jp/news/2021/03/13/national/science-health/merck-astrazeneca-clinical-trials/)

75. Annalisa Merelli, “Merck’s new Covid-19 drug could be one of the most lucrative drugs ever,” Quartz (Oct 1, 2021), [qz.com/2068247/merck-could-make-up-to-7-billion-from-its-covid-19-drugs-in-2021/](https://qz.com/2068247/merck-could-make-up-to-7-billion-from-its-covid-19-drugs-in-2021/)
76. Marc Lipsitch, “Why Do Exceptionally Dangerous Gain-of-Function Experiments in Influenza?” [pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/30151594/](https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/30151594/)
77. Jon Cohen and Charles Piller, “Emails Offer Look Into Whistleblower Charges of Cronyism Behind Potential COVID-19 Drug,” Science Insider (May 13, 2020), [www.science.org/news/2020/05/emails-offer-look-whistleblower-charges-cronyism-behind-potential-covid](https://www.science.org/news/2020/05/emails-offer-look-whistleblower-charges-cronyism-behind-potential-covid)
78. U.S. Government Defense Threat Reduction Agency (DTRA), [www.dtra.mil/](https://www.dtra.mil/)
79. Sharon Lerner, “Merck Sells Federally Financed COVID Pill to U.S. for 40 Times What it Costs to Make,” The Intercept (Oct 5, 2021), [theintercept.com/2021/10/05/covid-pill-drug-pricing-merck-ridgeback/](https://theintercept.com/2021/10/05/covid-pill-drug-pricing-merck-ridgeback/)
80. U.S. Department of Health and Human Services, “Biden Administration announces U.S. government procurement of Merck’s investigational antiviral medicine for COVID-19 treatment” (June 9, 2021), [www.hhs.gov/about/news/2021/06/09/biden-administration-announces-us-government-procurement-mercks-in](https://www.hhs.gov/about/news/2021/06/09/biden-administration-announces-us-government-procurement-mercks-in)

81. Ibid.

82. Manojna Maddipatla and Amruta Khandekar, Bengaluru, “Pfizer begins study of oral drug for prevention of COVID-19,” Reuters (September 27, 2021), [www.reuters.com/business/healthcare-pharmaceuticals/pfizer-begins-study-covid-19-antiviral-drug-2021](https://www.reuters.com/business/healthcare-pharmaceuticals/pfizer-begins-study-covid-19-antiviral-drug-2021)

83. Tyler Durden, “Pfizer Launches Final Study For COVID Drug That’s Suspiciously Similar to ‘Horse Paste,’” Zero Hedge (September 28, 2021), [www.zerohedge.com/covid-19/pfizer-launches-final-study-covid-drug-thats-suspiciously-similar-ivermec](https://www.zerohedge.com/covid-19/pfizer-launches-final-study-covid-drug-thats-suspiciously-similar-ivermec)

84. “You are not a horse. You are not a cow. Seriously, y’all. Stop it.” U.S. FDA @US\_FDA Twitter post (August 21, 2021 at 6:57 a.m.), [twitter.com/us\\_fda/status/1429050070243192839](https://twitter.com/us_fda/status/1429050070243192839) にゃ

85. “Intestinal Parasite Guidance: Summary of Recommendations. All Middle Eastern, Asian, North African, Latin American, and Caribbean refugees should receive presumptive therapy with: Albendazole, single dose of 400 mg (200 mg for children 12-23 months) AND Ivermectin, two doses 200 mcg/Kg orally once a day for 2 days before departure to the United States.” CDC Immigrant, Refugee, and Migrant Health website (as of September 26,

2021), [www.cdc.gov/immigrantrefugeehealth/guidelines/overseas-guidelines.html](https://www.cdc.gov/immigrantrefugeehealth/guidelines/overseas-guidelines.html)

86. Jake Tapper, “Don’t do it’: Dr. Fauci warns against taking Ivermectin to fight Covid-19,” CNN video (August 29,

2021), [www.cnn.com/videos/health/2021/08/29/dr-anthony-fauci-ivermectin-covid-19-sotu-vpx.cnn](https://www.cnn.com/videos/health/2021/08/29/dr-anthony-fauci-ivermectin-covid-19-sotu-vpx.cnn)

87. Leah Willingham, “Livestock medicine doesn’t work against COVID, doctors warn,” AP News (August 25, 2021), [apnews.com/article/health-coronavirus-](https://apnews.com/article/health-coronavirus-pandemic-69c5f6d4476ca9b25bc7038e99a4a075)

[pandemic-69c5f6d4476ca9b25bc7038e99a4a075](https://apnews.com/article/health-coronavirus-pandemic-69c5f6d4476ca9b25bc7038e99a4a075) にや

88. Vanessa Romo, “Joe Rogan Says He Has COVID-19 And Has Taken The Drug Ivermectin,” NPR (September 1,

2021), [www.npr.org/2021/09/01/1033485152/joe-rogan-covid-ivermectin](https://www.npr.org/2021/09/01/1033485152/joe-rogan-covid-ivermectin)

89. Tyler Durden, “Rolling Stone Issues ‘Update’ After Horse Dewormer Hit-Piece Debunked,” Zero Hedge (September 5, 2021), [...](https://www.zerohedge.com/covid-19/rolling-stone-horse-dewormer-hit-piece-debunked-after-hospital-says-no-iv)

[www.zerohedge.com/covid-19/rolling-stone-horse-dewormer-hit-piece-debunked-after-hospital-says-no-iv](https://www.zerohedge.com/covid-19/rolling-stone-horse-dewormer-hit-piece-debunked-after-hospital-says-no-iv)

90. Ken Miller, "Dozens line up at Oklahoma City church for COVID vaccine," Associated Press (January 26, 2021), [apnews.com/article/race-and-ethnicity-baptist-oklahoma-city-oklahoma-coronavirus-pandemic-ec6293de7e](https://apnews.com/article/race-and-ethnicity-baptist-oklahoma-city-oklahoma-coronavirus-pandemic-ec6293de7e)

91. Peter Wade, "One Hospital Denies Oklahoma Doctor's Story of Ivermectin Overdoses Causing ER Delays for Gunshot Victims: The hospital says it hasn't experienced any care backlog due to patients overdosing on a drug that's been falsely peddled as a covid cure," Rolling Stone (Updated September 5, 2021, 8:55 pm ET), [www.rollingstone.com/politics/politics-news/gunshot-victims-horse-dewormer-ivermectin-oklahoma-hospi](https://www.rollingstone.com/politics/politics-news/gunshot-victims-horse-dewormer-ivermectin-oklahoma-hospi)

92. "Video: Livestock feed stores are reporting shortages of ivermectin as many Americans buy up the anti-parasite drug and misuse it to treat Covid," The Daily Mail (September 17, 2021), [www.dailymail.co.uk/video/health/video-2504931/Ivermectin-Explained-Anti-Parasite-Drug-Emerged.html](https://www.dailymail.co.uk/video/health/video-2504931/Ivermectin-Explained-Anti-Parasite-Drug-Emerged.html)

93. Jon Jackson, "Patients Overdosing on Ivermectin Are Clogging Oklahoma ERs: Doctor," Newsweek (September 2, 2021), [www.newsweek.com/patients-overdosing-ivermectin-are-clogging-oklahoma-ers-doctor-1625631](https://www.newsweek.com/patients-overdosing-ivermectin-are-clogging-oklahoma-ers-doctor-1625631) にゃ

94. Martin Pengelly and agencies, "Ivermectin misuse adding to Covid pressures at Oklahoma hospitals, doctor says: Jason McElyea says people overdosing on

anti-parasitic drug that some people believe without evidence can cure or treat Covid,” The Guardian (September 13, 2021), [www.theguardian.com/world/2021/sep/04/oklahoma-doctor-ivermectin-covid-coronavirus](https://www.theguardian.com/world/2021/sep/04/oklahoma-doctor-ivermectin-covid-coronavirus)

95. Graig Graziosi, “Doctor says gunshot victims forced to wait for treatment as Oklahoma hospitals overwhelmed by coronavirus patients. (First paragraph: “People poisoning themselves with a drug most commonly used as a horse dewormer are turning up hospitals in rural Oklahoma, a doctor has claimed”), The Independent (September 4, 2021), [www.independent.co.uk/news/world/americas/us-politics/gunshot-oklahoma-hospitals-ivermectin-overdose](https://www.independent.co.uk/news/world/americas/us-politics/gunshot-oklahoma-hospitals-ivermectin-overdose).

96. “Patients overdosing on ivermectin backing up rural Oklahoma hospitals, ambulances”: “The scariest one I’ve heard of and seen is people coming in with vision loss,’ he said.” Twitter repost by Rachel Maddow, MSNBC @maddow (September 2, 2021), [twitter.com/maddow/status/1433521336282976256](https://twitter.com/maddow/status/1433521336282976256) にゃ

97. Tyler Durden, “Rolling Stone Issues ‘Update’ After Horse Dewormer Hit-Piece Debunked,” Zero Hedge (September 5, 2021), [...](#)

[www.zerohedge.com/covid-19/rolling-stone-horse-dewormerhit-piece-debunked-after-hospital-says-no-ive](http://www.zerohedge.com/covid-19/rolling-stone-horse-dewormerhit-piece-debunked-after-hospital-says-no-ive)

98. Martin Pengelly, “Oklahoma hospitals deluged by ivermectin overdoses, doctor says,” Guardian (Sep. 4, 2021), [archive.is/iIYB7](https://archive.is/iIYB7) にや

99. U.S. Food & Drug Administration, “Why You Should Not Use Ivermectin to Treat or Prevent Covid-19,” [www.fda.gov/consumers/consumer-updates/why-you-should-not-use-ivermectin-treat-or-prevent-covid-19](https://www.fda.gov/consumers/consumer-updates/why-you-should-not-use-ivermectin-treat-or-prevent-covid-19) ☒

100. Centers for Disease Control and Prevention, Rapid Increase in Ivermectin Prescriptions and Reports of Severe Illness Associated with Use of Products Containing Ivermectin to Prevent or Treat COVID-19, (Aug 26, 2021). [emergency.cdc.gov/han/2021/han00449.asp](https://emergency.cdc.gov/han/2021/han00449.asp)

101. Erin Woo, “How Covid Misinformation Created a Run on Animal Medicine,” The New York Times (September 28, 2021), [www.nytimes.com/2021/09/28/technology/ivermectin-animal-medicine-shortage.html?searchResultPosition=](https://www.nytimes.com/2021/09/28/technology/ivermectin-animal-medicine-shortage.html?searchResultPosition=)

102. Dr. Eddy Bettermann, MD, “Massive ‘horse’ lies about Nobel prize winning treatment,” (September 27,

2021), [dreddymd.com/2021/09/27/massive-horse-lies-about-nobel-prize-winning-treatment/](https://dreddymd.com/2021/09/27/massive-horse-lies-about-nobel-prize-winning-treatment/)